

2021年8月2日

みずほディーラーズアイ (2021年8月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 108.00 ~ 112.00

市場営業部 為替営業第一チーム 逸見 久貴

■ 先月の為替相場

先月のドル/円相場は下落。月初、111円台前半でオープン。6月末からのドル買いの流れが継続する中、米主要株価指数や原油価格が堅調に推移。リスク選好的な雰囲気の高まりから、111円半ば付近まで上昇。翌2日もドル買いの流れは継続すると、年初来高値を更新し111.66(月高値)をつけた。その後、米6月雇用統計が強弱区々の結果となると、反転し111円付近まで下落。5日から7日にかけては、欧米経済指標の冴えない結果がドル/円の重しとなり、110円台半ば付近まで軟調に推移。7日に発表されたFOMC議事要旨では、景気の上向きが報告されたが、早期の金融緩和縮小姿勢が示されなかったことからドル売り優勢の展開。加えて、コロナ変異株の蔓延が懸念され欧州主要国株が急落する等、リスクオフの動きとなったことで、節目の110円を割り込み、109円台半ばまで下落。9日は5・10日絡みのドル買いや、米株の反発を横目に110円を回復。12日から14日にかけて米主要3指数が市場最高値を更新したことや、米テーパーリング観測の再燃とそれに伴う米金利上昇を背景に110.70付近まで上昇。しかし、パウエルFRB議長が議会証言でハト派な発言をすると、米金利は低下し、ドル/円も下落に転じると再び110円を割り込む展開。19日、コロナ感染の再拡大に伴い世界経済の先行き不透明感が意識されると、リスク回避の円買いが進行。米金利の低下も相俟って月安値となる109.07まで下落。20日、新規材料ない中、狭いレンジでの推移となったが、海外時間に入ると米株式市場が前日の下落から反発し、米長期金利が上昇に転じると、ドル/円はじり高となり110円近辺まで値を戻した。21日、本邦4連休を前に次第に膠着感が強まる中、欧米株の堅調な動きに円売り優勢となり110円台前半を確りと推移。23日、リスク回避の動きが後退し、米金利も上昇すると、110円台半ばまで底堅く推移。本邦連休明けの26日は実需の売りフローや米金利低下によって110円台前半に押し戻された。27日、中国当局の教育、テクノロジー関連の新たな規制を受け中国株が大幅下落する動きに110円を挟んでもみ合う展開。一巡後はFOMCを前にドル売り優勢となり、109円台半ばまで下落。28日、注目されたFOMCでは声明文で「経済は雇用の最大化と物価の安定化に向けて進展した」との見方が示され、テーパーリングにまた一歩近づいたとの見方から、ドル買いが持ち込まれ110円台を回復。しかし、その後のパウエル議長の記者会見でハト派なスタンスが示されたことで、ドル/円は反落。29日、米第2QGDPや新規失業保険申請件数が市場予想対比、弱い結果となると109円台半ば付近まで下落。30日は株式市場の軟調を横目に109円半ば付近を推移している。

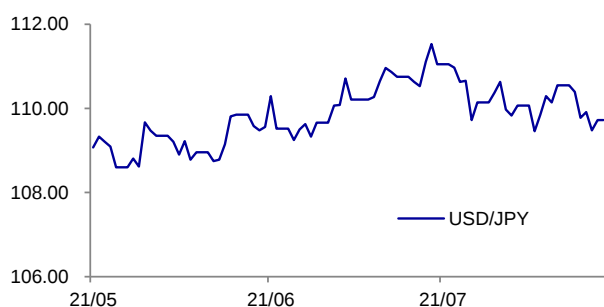
■ 今月の見通し

8月のドル/円相場は底堅い推移を想定。

グローバルにデルタ株の感染が拡大し、経済正常化に向けた先行き不透明感が根強いものの、日本がコロナ対応で欧米諸国に劣っている状況に変わりはなく、連日、感染者数の最多記録を更新している日本の円を買い進める理由が見当たらない。先月、感染拡大によってリスクアセットが大きく売られ、米金利も1.2%を割り込むなど、リスクオフの動きが強まった時間帯もあったが、ドル/円の反応はレンジ内と言える範囲に留まり、リスクオフの円買いも期待できないであろう。金融政策に目を向けると、7月FOMCでの声明文は概ね上方修正され、テーパーリングへの地均しと捉えられる文言が追加された。米主要株価指数が揃って最高値を更新するなど、米経済正常化への期待感も高まりを見せる中、米金利への上昇圧力がかかり易い環境となっている。米金利は3月頃に1.8%手前まで上昇した後、足元では1.2%付近まで低下していることで、むしろ上昇余地を残していると考えている。パウエル議長の記者会見では、回復の鈍い雇用情勢について言及したうえで、利上げ検討は時期尚早とコメントし、これまでの慎重なスタンスを継続しているが、早ければ今月26～28日に予定されているジャクソンホールにてハト派スタンスが和らぐ可能性もある。市場の期待が先行する形で当該イベントに向け米金利が上昇し、ドル/円もつれ高となる展開を予想している。

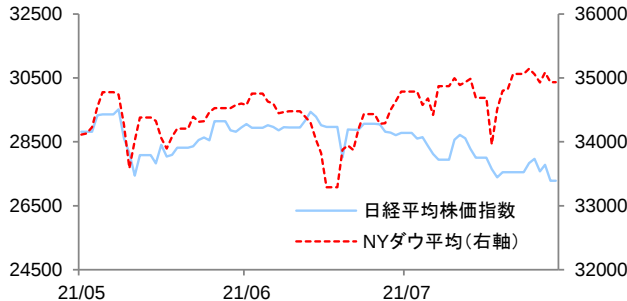
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	ISM製造業景況指数	6月	60.9	60.6	61.2
7/2	非農業部門雇用者数変化	6月	720k	850k	559k
7/2	失業率	6月	5.6%	5.9%	5.8%
7/6	ISM非製造業景況指数	6月	63.5	60.1	64.0
7/13	CPI (前月比)	6月	0.5%	0.9%	0.6%
7/16	小売売上高速報(前月比)	6月	-0.3%	0.6%	-1.3%
7/15	鉱工業生産(前月比)	6月	0.6%	0.4%	0.8%
7/29	GDP (前期比)	第2Q	8.4%	6.5%	6.4%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	15名	111.50 ～ 108.50	ベア	5名	111.00 ～ 108.00
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ブル	112.00 ～ 109.00	引き続きコロナ変異株の状況やインフレを含め経済指標を確認しながらFEDのテーパリング時期を探る展開。リスクオン地合いと日米のコロナ感染状況格差や金融政策の方向感の違いからドル円は底堅く推移しよう。
矢野	ブル	111.50 ～ 109.00	コロナ懸念の台頭で足元では上値が重いものの、ワクチン接種は着実に進んでおり時間の経過と共に不透明感は払拭されよう。米国では金利先高観に加えオフィス回帰の本格化など今後経済活動再開の好影響が期待され相場の下支えとなる。
筒井	ベア	111.00 ～ 107.50	7月初旬の111.5台を頂点に、上値重く下値を切り下げる展開を予想。米実質金利の低下は顕著であり、住宅販売も価格高騰による販売の頭打ちや補助金打ち切りによる個人消費の減退懸念を市場は折り込むだろう。
加藤	ブル	112.00 ～ 108.50	労働参加率等の雇用情勢とデルタ株の経済へのネガティブインパクトに鑑み、米国当局はテーパリングを示唆し難い状況ではあるものの、インフレは着々と進行していて、米国の次の動きがテーパリングであることに変わりはない。
山岸	ブル	111.50 ～ 108.00	7月FOMCでテーパリング議論の進展を確認。経済活動の正常化が進み、また資産価格高騰などの弊害も大きいことから、金融緩和縮小の議論を着実に進めると見られ、ドル円は堅調推移を予想。デルタ株と8月の円高アノマリーに警戒。
牛島	ブル	111.50 ～ 108.00	8月下旬のジャクソンホールにてテーパリングに言及されるまでは、緩やかなリスクオンが継続するとみる。米株高&ドル売り地合いとなりそうだが、ドル円はクロス円にサポートされて上値を試す展開と見ている。
尾身	ベア	111.00 ～ 108.00	ドル売りの流れは継続していると考えている。背景は、低金利政策の継続、財政拡張政策、世界的な通貨安選好の流れ。但し、米長期金利の上昇や株価下落によるリスクオフなどが、一部ドル買いを起こしておりスピードは緩やかだろう。
上野	ブル	112.00 ～ 108.00	7月のFOMC以降、ドル売り地合いが続いているが、方針転換などのイベントが望みにくい中では、ドル売り基調が継続する蓋然性は乏しいのでは。
山口	ブル	111.50 ～ 108.00	インフレ率の高騰は一時的、さらに雇用の回復にもまだ時間がかかる状況の中、FRBの本格的な利上げ織り込みにはまだ時間がかかる。一方で日本は新規感染者が増加し、緊急事態宣言も延長されており、出口に近いドルが選好されるだろう。
甲斐	ベア	110.50 ～ 108.00	コロナとの付き合い方が依然として手探りななか、FRBは明確に出口の議論を進めることはできないと思われる。テーパリング期待が後退するのとともに夏枯れ相場が意識され、円高傾向は続くと思われる。

小野崎	ベア	111.00 ～ 107.50	FRBのテーパリングに向けた動きは否定しないものの進展は加速せず。7月のFOMCにおけるパウエル議長会見でもハト派な姿勢を示唆。ジャクソンホールでの議論期待はあるが、高まらない議論・下がる米金利にドル高は期待ほど高くない
玉井	ブル	111.50 ～ 108.50	パウエル議長のハト派姿勢は変わらないものの、先日のFOMCでもテーパリングの議論が進んでいることが確認されており、8月のジャクソンホールに向け米金利上昇、ドル高を見込む。
原田	ブル	111.50 ～ 108.50	デルタ株まん延による経済失速の懸念はあるものの、インフレ率は上昇。経済指標も着実に上向いており、ドル円も底堅い推移を見込む。一方で、8月は夏休み期間となり流動性が落ち込むことから、ボラティリティーの高まりには留意。
大庭	ブル	110.75 ～ 108.75	東京オリバラ期間は限定的な値幅を予想。米労働市場で一度自動化が進んだ環境下、コロナ前の水準まで雇用回復は難しいとの懸念等から、ドル円は上値を抑えられているが、テーパリングへの期待から上目線継続か。
上遠野	ブル	112.00 ～ 108.00	コロナ変異種感染拡大による経済先行きの再減速警戒感から8月中旬にかけては上値の重い展開を予想。ただし下旬のジャクソンホールにて金融政策正常化に向けた道筋が示されることを展望。米金利主導で反転持ち直しを予想。
小林	ブル	111.50 ～ 108.50	8月月初において発表される雇用統計が強い結果が出れば、下旬に予定されているジャクソンホールにてテーパリングに向けての示唆可能性あり、その場合は米金利上昇からのドル買い展開を予想。
逸見	ブル	112.00 ～ 108.50	コロナの動向は無視できないものの、米金利上昇の余地がある中、8月ジャクソンホールのパウエル議長の講演に向けて、テーパリングへの期待感が高まり易い状況。ドルは底堅い展開を想定。
大谷	ブル	111.50 ～ 108.50	FRBの次の一手がテーパリングである路線に変更はない状況下、現状の米10年債の低下は行き過ぎであるものと考え。ジャクソンホールにテーパリングに対する言及がなされドルが買い戻される展開を予想。
鈴木	ブル	111.50 ～ 108.50	依然としてインフレ率も上昇しており、ドル買い基調は継続。下旬に予定されているジャクソンホールまでは明確な方向性は出づらいたろうが、他通貨も含めて円を買う理由もなく、ドル円の下値は底堅い印象。
大熊	ベア	111.00 ～ 108.00	テーパリング開始の準備は進んでいるものの、米長期金利は低下しており、指標からも米経済の回復はピークアウトしたと見られる。インフレの加速とともに米経済の先行き懸念が台頭し、上値重い推移を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1700 ~ 1.2100
EUR/JPY 129.00 ~ 132.00

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

■ 先月の為替相場

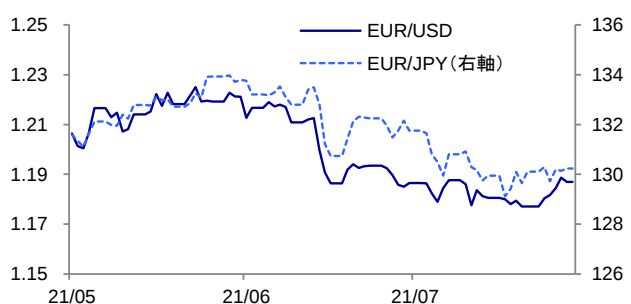
1日、ユーロ/ドルは1.18台前半まで下落、一服後は1.18台後半まで値を戻した。2日は1.18台半ば付近での取引。5日は、米国休場の中、終日を通して1.18台後半で方向感なく推移した。6日は、前日発表の経済指標が好感され、一時月高値の1.1895までじりじりと値を切り上げたが、独7月ZEW景況感期待指数が予想を下回ったことやユーロ/円が下落する動きに1.18ちょうど付近まで連れ安となった。7日はドルが急速に買い戻される動きに一時1.17台後半まで下落したが、FOMC議事要旨の内容を受けたドル売りに一時1.18台を回復した。8日は海外市場で1.17台後半まで下落していたが、ドル売りが強まり1.18台半ばまで値を戻した。9日は1.18台半ば付近での取引が継続した。12日は、デグンドスECB副総裁が量的緩和縮小に対し慎重な姿勢であることが伝わり、ユーロ売りが加速、1.18台前半まで下落した。13日は、1.18台半ばでの小動きだったが、海外時間に入り、米6月CPIの結果を受けたドル買いに再び1.18台を割り込んだ。14日は1.17台後半を推移したが、パウエルFRB議長のハト派的な議会証言や米長期金利の軟調推移にドル売りが加速し、1.18台前半まで値を戻した。15日はドルの軟調推移を受けて1.18台半ばで推移していたが、後半にかけてはドル売りが強まって一時1.18を割り込んだ。16日も前日の流れを受けて1.18台前半での取引となった。19日は、世界各地での新型コロナウイルスの感染再拡大懸念や原油価格の下落によるリスク回避の動きから、ドル買い圧力に下押しされて1.17台半ばまで値を下げた。その後、米長期金利の低下を受けたドル売りから上昇に転じ、1.18台前半まで値を上げた。20日は、ユーロ/円が下落する動きに連れ安となり、1.17台半ばまで下落した。21日も、前日の流れを受けて一時月安値1.1752を更新した。22日はECB会合にてフォワードガイダンスが変更され、インフレが予想範囲より先に2%を超えて推移するまでは利上げはないとしたことで、一時ユーロ売りが優勢となったが、値動きは限定的。23日は1.17台後半での推移に終始した。26日は、独7月Ifo景況感指数が市場予想を下回り一時下落したが、その後は1.18台前半まで反発した。27日は、株式市場の軟調推移やリスク回避の円買い圧力に押されたが、米長期金利の急低下にドル売りが加速し、1.18台半ばまで値を戻した。28日は、パウエルFRB議長のハト派な発言内容が材料視されるとドル売りが優勢となり、1.18台半ばまで値を上げた。29日は米4～6月期GDPが予想比弱い結果となったことを受けて、一時1.1893まで上昇した。30日も前日の高値を更新する展開となっており、1.19付近での取引が続いている。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は対ドル、対円で共に底堅い値動きになると予想している。具体的には、対ドルで1ユーロあたり1.17ドル～1.21ドル、対円で129円～132円のレンジにて推移する予想しており、現行の相場水準での堅調推移を予想している。背景としては、米金融緩和の長期化を受けたドルの軟調推移がユーロを押し上げ続けると考えている。ECBが緩和維持に対して積極的な姿勢を示しており、金融政策の観点からはユーロは売られる要因があるにも関わらず、安くない理由はドル売り相場が継続している結果だと考えている。ユーロ売りに転じるリスクとしては、米国のテーパリング開始時期が明示されることにより、ドル買いが優勢になるとユーロは対ドルで弱くなる可能性が高い。先月の米FOMCでは足元での利上げの必要性について否定されてしまったので、米国のテーパリングについては今月26日から28日のジャクソンホール会合におけるパウエルFRB議長による講演での発言に注目が集まっている。各国の金融政策者が集まる当会合にて、米国の金融政策が引き締めに転じることが明示されれば、ドル買いユーロ売り相場に転じる可能性が高いと警戒している。その他のテーマとし注目しておきたいのは、デルタ株の流行により、経済回復に遅れが出るかどうか、また追加のワクチン接種が行動制限の解除に必要となるかどうかという点。6月までは、ワクチン2回の接種が世界的に進んで、夏以降は行動制限の全面的解除から経済回復の加速を予期したが、先月からはデルタ株の蔓延により追加のワクチン接種の必要性が議論されたあたりから、経済回復の遅れが意識されるようになった。これにより、米国のテーパリング時期が遅れると受け止められれば、ドルの軟調推移は継続することとなり、ユーロの堅調推移は維持されることになるだろう。注目の経済指標は、CPIやPPIなどのインフレ指標とGDPや小売売上高などの経済回復が確認できる指標。インフレ率の上昇についてECBは一時的なものとして認めており、例えばインフレ率の大幅な上昇が見られても金融政策の変更にはすぐに結びつかない可能性が高い。但し、コロナ禍を受けた世界的なインフレの上昇は一時的なものか懐疑的な見方も多く、インフレ指標の推移には注目している。また、経済活動の回復が経済指標で確認されれば、ユーロの堅調推移が正当化され底堅い推移の一因となるため注目している。

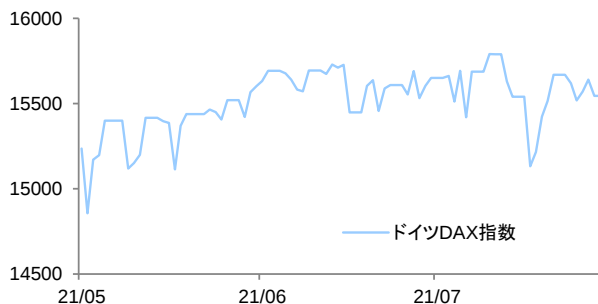
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	欧州マクミット・ロ製造業PMI	6月	63.1	63.4	63.4
7/2	欧州PPI(前年比)	5月	9.6%	9.6%	7.6%
7/5	欧州マクミット・ロサービス業PMI	6月	58.0	58.3	58.3
7/6	欧州小売売上高(前年比)	5月	8.2%	9.0%	23.3%
7/6	独ZEW景気期待指数	7月	-	61.2	81.3
7/14	欧州鉱工業生産(前年比)	5月	22.2%	20.5%	39.4%
7/16	欧州CPI(前年比)	6月	1.9%	1.9%	2.0%
7/22	欧州ECB預金ファシリティ・レート	7月	-0.5%	-0.5%	-0.5%
7/29	欧州景況感	7月	118.2	119.0	117.9

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	5名	1.2100 ～ 1.1750	ベア	15名	1.1950 ～ 1.1750
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ベア	1.2000 ～ 1.1700	相対的な欧州景気回復の鈍さや、新たなフォワードガイダンスがより一段とハト派化したECBとテーパリングの時期を探るFEDとの金融政策の違いに、ユーロドルは上値重く推移しよう。
矢野	ベア	1.1950 ～ 1.1750	直近のECB政策理事会では政策金利のフォワードガイダンスが修正されたものの、コロナ感染拡大懸念が根強く残っていること、また米国に比して経済活動の回復がスローなことから上値は限定的となろう。
筒井	ブル	1.2100 ～ 1.1750	7月同様、米のテーパリングストーリー等からユーロの弱さを想定する向きが多く、ポジションの偏りも相応に見られる中、ユーロ高に進む可能性大。中国の経済活動が活発化していることもこのシナリオを支える。
加藤	ベア	1.1980 ～ 1.1750	米国とユーロ圏における当局スタンスの違いは依然大きいと考える。現状では先に動くのは米国であろうことは容易に想像ができ、結局ユーロ/ドルの頭を押さえる圧力となろう。
山岸	ベア	1.2000 ～ 1.1750	ECBは物価目標を上げ、7月会合では長期にわたって超低金利政策を続ける方針を示しており、金融政策面からユーロは上値重い展開継続か。一方で5月の直近高値から調整進み、また米金利上昇に一服感出ているため、下値も限定的と予想。
牛島	ブル	1.2000 ～ 1.1800	緩やかなリスクオン相場の中で、ドルが対主要通貨で売られやすい地合いが続くとみている。ECBの緩和スタンスは米国よりも慎重であるものの、当面はユーロが堅調に推移しそう。
尾身	ブル	1.2100 ～ 1.1700	EURは堅調地合いが継続すると予想している。背景は、ドル売りの継続。リスクはPEPPの縮小や 政策金利の引き下げなど。政府高官などから利下げ余地の言及が度々見られるが実現の確度は低そうだ。
上野	ベア	1.2000 ～ 1.1750	7月後半のユーロの騰勢も、あくまでドル売りの波及効果。米テーパリングの行方について、方向感が大きく変わることは望みにくく、調整地合い優勢の展開になるのでは。
山口	ベア	1.1950 ～ 1.1700	ECBは一時的な物価上昇を容認するとしており、FRBと比較すると出口への距離が依然として遠い。金融政策へのスタンスの違いからユーロは上値重い推移が継続すると予想。さらに、リスクオフドル買いにも警戒したい。
甲斐	ブル	1.2100 ～ 1.1800	コロナとの付き合い方が依然として手探りななか、FRBは明確に出口の議論を進めることはできないと思われる。米国のテーパリング期待が後退することでドル売り傾向は続くと思われる。
小野崎	ベア	1.2000 ～ 1.1500	テーパリング議論開始の見込めるFRBに対し慎重姿勢のECB。両社のスタンスの違いを勘案すればUSD買い優勢の動向が見込まれる。
玉井	ベア	1.1950 ～ 1.1750	先日のECBではインフレ目標の変化により、より長期的な緩和姿勢を維持することを示し、引き続きFRB対比ECBは緩和的なスタンス。ユーロは上値の重い動きを予想する。
原田	ベア	1.1950 ～ 1.1750	欧州の経済活動再開期待はあるものの、ECBはハト派なスタンスを維持。インフレ率が高まり、テーパリングの影が見える米国に対し、政策の方向感の違いからユーロは上値の重い推移を予想する。
大庭	ベア	1.1980 ～ 1.1750	上値の重い展開を予想。中央銀行の金融引締めは米国が先行すると考えられる中、ドル買いが優勢か。経済指標を比べても米国に比べて回復の鈍化傾向が強く、感染状況を見極めるため、ECBはテーパリングの判断を12月まで保留か。
上遠野	ベア	1.1950 ～ 1.1750	緩急程度の差はあれ金融政策正常化に向けて進む米国と、直近ハト派色を強めたECBとのスタンス乖離は継続してユーロの重しとなろう。デルタ株再拡大もあり域内コロナ後の回復はより緩慢になるものと予想。
小林	ベア	1.1950 ～ 1.1700	米国においてテーパリング観測が持ち上がっている一方、ECBにおいては金融緩和の維持を当分の間継続することが発表されており、ユーロはドル対比軟調な推移を予想。
逸見	ベア	1.1950 ～ 1.1700	米国のテーパリング観測が盛り上がり易い一方で、ECBはハト派スタンス継続。金融政策差によってユーロドルは上値重い展開を想定。
大谷	ベア	1.1950 ～ 1.1700	ECBは7月の会合でフォワードガイダンスを変更しており、早期の金融緩和縮小観測は大きく後退している。一方で米国のテーパリング期待は引き続き高い中、金融政策のスタンスの違いからユーロは上値重い推移を予想。
鈴木	ベア	1.1950 ～ 1.1700	ECBのハト派スタンスの維持やFRBが緩和縮小に徐々に向かっていることを背景としたドル買い基調が、依然としてユーロの重しとなりそう。デルタ株の蔓延による経済停滞懸念もあり、軟調推移を予想。
大熊	ブル	1.2100 ～ 1.1750	欧米株の堅調な動きを背景としたリスクオンの地合いではユーロが上昇しやすいことに加えて、米景気回復の勢いに陰りが見えてきた状況下では相対的にユーロが買われやすく、底堅い展開を予想。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3600 ~ 1.4200
GBP/JPY 147.00 ~ 155.00

欧州資金部 神田史彦

■ 先月の為替相場

先月のポンドは前月比若干の上昇で着地。1日はベイリー英中銀総裁が「一時的なインフレ高進に過剰反応すべきでない」と発言をしたことで、6月会合から舵をきったわけではないものの、利上げ期待への牽制ととれ、米Fedとの対比でその後のポンドのトレンドを決定づけた。1.38を挟んでの推移が続く中、翌週9日には英5月月次GDPが予想を下回ったものの、ポンドは下げ止まってから1.39台へ反発。12日に1.39を割りこむと上値重い展開に。その後、14日は英6月CPIが2018年来の上昇率となる中ポンドは買われる。パウエルFRB議長の議会証言がややハト派的だったこともありポンド買いは加速したものの1.39に届かず。翌15日も、英中銀委員がインフレ率の上昇で債券購入の減額が今後1、2カ月後の会合で検討される旨の発言をしたが、1.39は重かった。19日には予定通り、英国のロックダウンは終了したものの、英国内では新規コロナ感染が5万人となるなど楽観ムードとはならず。むしろ英国に限らず世界的なコロナデルタ変異種への警戒感に強くリスクオフムードからポンドは1.36半ばまで急落。20日には1.3573の月中安値まで下げるが、翌21日も同水準で踏みとどまると反発。そこからポンドはドルの強弱に振られながらも1.38台まで買い戻される。28日は米FOMCの結果待ちの中、直近の米株価の上昇もあってカタ派への期待からドルが買われる展開となった。果たしてFOMCは現状維持となり、米経済の状況については「進展があった」との一定の評価が示されたものの、量的緩和縮小については「今後の複数会合で評価を続ける」との文言に留めたことでドルの反落を誘い、ポンドは1.39台を回復。すると29日はそこまでの月中高値となる1.3982をつけ月末を迎えた。

■ 今月の見通し

今月のポンドは先月末からの下げ止まり継続を予想。まずは中銀政策見通しの違い(殊に米Fedとの違い)が消化もしくは是正されると見られることが挙げられる。先月先んじて英中銀ベイリー総裁は金融正常化への牽制をしたが、その後の米Fedのトーンも決してカタ派とは言い切れない。また一部金融機関が21年の米経済見通しを引き下げられる例が見られ、英金利の先安観は是正されていくとみる。もともと5日の英中銀会合でのカタ派シフトを見る向きもある。英経済の回復が5月時点の英中銀の成長見通しを上回るとのトーンの発言が英中銀内で見られていたためだ。一方でベイリー総裁はじめ緩和継続を示唆する発言をする委員もいる中で、本会合での政策変更までは期待されていないが、とくに量的緩和に関する意見がどう割れるかが注目されるだろう。次にコロナデルタ変異種の英国内感染増加がピークアウトした点。先月19日の週は感染者が5万人前後だったもののそこから月末にかけては2万人台まで数を減らしてきている。また英国内の20～30代の多くが8月から9月にかけて2回目のワクチン接種を完了するタイミングとなることもあり、英政府が再ロックダウン(7月19日のロックダウン解除時は再導入も排除せず)へ動く可能性は低いとみられる。とはいえコロナについては英国内のみの数字で計れないためリスクオフ時にはポンドは下落すると思われる。基本的には市場関係者が夏休みに入るとみられ大きな変動は想定しないが、米株式が史上最高値にある一方で、中国・香港市場の混乱などが米投資家のセンチメントを損ねるとボラティリティの上昇を招くリスクがあることに留意。その際もポンドはリスクオフで売られる可能性が高い。

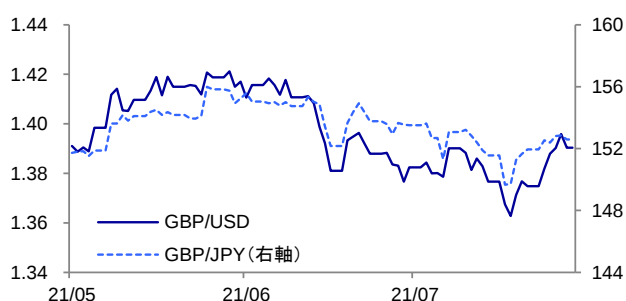
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のランチ事情』

Mizuho House(ロンドン支店の入っているビル。地図アプリによっては同ビル名で検索するとヒットします。)ではシェフがおり、パンデミック以前はオンサイトでのランチ面談時にはレストランさながらのランチコースを手配することができた。パンデミック下、ご存じの通り、英国は世界でも最も厳しいロックダウンを行っていたこともあり、オフィス出勤を認められた人たちの昼食の調達先が限られていた。そこでロックダウン中はオフィス出勤者向けに、同シェフ特製のサンドイッチが昼食として振舞われていた。(先月19日に英国のロックダウンが撤廃されたことで同措置も停止となった。)ポストコロナの働き方や、オフィスの在り方がどのようになるかは、まさに協議中ではあるが、将来、運よくランチ時間にみずほロンドン支店での面談が予定された際は、セント・ポール寺院をきれいに見渡せるMizuho Houseのミーティングルームでのランチも楽しみにお越しください。

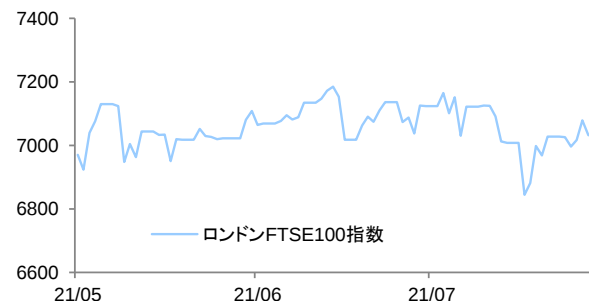
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	64.2	63.9	63.9
7/5	サービス業PMI	6月	61.7	62.4	62.4
7/6	建設業PMI	6月	64.0	66.3	64.2
7/9	鉱工業生産(前年比)	5月	21.6%	20.6%	27.2%
7/9	GDP(前月比)	5月	1.5%	0.8%	2.0%
7/14	消費者物価指数(前年比)	6月	2.2%	2.5%	2.1%
7/15	ILO失業率	5月	4.7%	4.8%	4.7%
7/23	小売売上高(含自動車/前年比)	6月	9.5%	9.7%	24.6%
7/23	製造業PMI	7月	62.4	60.4	63.9

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7200 ~ 0.7600
AUD/JPY 79.20 ~ 85.20

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

今月は豪州でのロックダウンが悪材料となり0.7290まで年初来安値を更新した。第一週、堅調な米6月雇用統計発表後はドル買いが強まり豪ドルは0.7445まで下落した。第2週目、RBAはYCCの対象を現行の2024年4月償還を維持、債券購入に関しては現行の債券購入が9月に終了後、11月中旬まで購入ペースを現行の週50億豪ドルから週40億豪ドルに減額すると発表した。0.7600手前まで上昇後は売りとなり0.74後半まで下落した。ロウRBA総裁は会見で「完全雇用には失業率が4%に近づける必要がある」とし、「2023年の利上げを示唆しているわけではない」と述べた。7日、OPEC+での協議決裂を受け、原油価格が不安定な動きとなっていたが、協議決裂は供給減少ではなく増加につながるの見方が広まり、原油先物が1ドル超下落。豪ドルは0.75前半から0.74半ばまで下落した。また6月末からNSW州で実施されているロックダウンの延長も豪ドルの重しとなった。FOMC議事録要旨では「テーバリング開始に向けた進展が続く」と予想されるも「引き続き不透明感強い」とあった。これをうけて米株は反発し、豪ドルは0.7480近辺から再び0.75台乗せるも、リスク回避の流れから0.7417まで下落した。ロウRBA総裁は講演で「利上げの条件はデータ次第で、インフレ動向に基づく」、「持続的にインフレが2-3%になるまで2024年までかかる見通し」と繰り返した。第3週目は上値の重い展開。13日は中国6月貿易収支が予想を上回り0.7500近辺まで上昇も米6月消費者物価指数が予想を大きく上回る結果にドル買いが強まり豪ドルは0.7430近辺まで下落した。14日は強い豪7月消費者信頼指数やRBNZが政策決定会合にて、大規模資産買い入れの追加資産購入を23日に停止することを発表すると、早期利上げ観測からNZDが上昇。豪ドルも連れ高となった。第4週はシドニーでコロナ規制が一段と強化されたことや、VIC州のロックダウン延長が重しとなり軟調に推移。21日、豪6月小売上高が予想比で下振し、一時0.7290を付けた。22日、NSW州の1日のコロナ新規感染者数が今年最多を記録したとの報道を受け0.7340近辺まで下落したが、豪金利上昇などに支えられその後上昇に反転。リスクセンチメントが徐々に改善する中、0.7380近辺まで上昇。28日、豪Q2CPIが予想を上回り、瞬間的に0.7375近辺まで上昇したがシドニーロックダウンの延長決定が重しとなり反落した。

■ 今月の見通し

8月の豪ドルは依然として頭の重い展開を予想する。

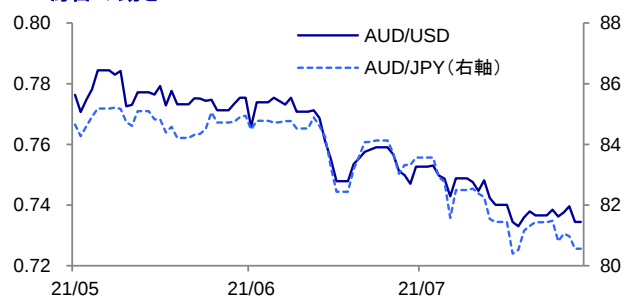
6月26日から始まったNSW州でのロックダウンは再延長され、とうとう8月28日まで厳格な行動規制がしかれることとなった。7月にはNSW州だけでなくVIC州やSA州も一部ロックダウンとなったため、今月発表される月次の豪経済指標からその影響が始めるとみる。シドニー大都市圏でのロックダウンが1ヵ月続いた場合、GDPへの影響が1ヵ月で70億豪ドル程度との見積もりが出てきている。ロックダウンにより豪州経済の回復ペース鈍化が懸念され、RBAの金融スタンスにも影響するとみられる。8月3日のRBA会合では先月発表した9月から11月にかけてのテーバリングを撤回、もしくは債券買い入れ額を現行の週50億豪ドルから今度は週60億豪ドルに引き上げるのではとの予想も出てきている。3日のRBA理事会で9月から予定されている債券購入減額の撤回、もしくは一時的な債券購入増額となれば、豪ドルは大きく下落するとみられる。一方、米FOMCでは引き続き経済の進展を確認しながらも、インフレ上昇は一過性の要因を反映していると繰り返すとみられ、FRB高官からのハト発言は引き続き豪ドルの下値を支える材料となろう。

RBAの市場の利上げ予想に関しては金利先物が織り込む利上げのタイミングも後ずれしており、7月のRBA直後には2022年末までに1.5回程度の利上げを織り込んでいたが、利上げ1回程度まで後退。COVID新規感染者数の増加がある程度収まりロックダウンが解除されれば、豪州経済は再び早いスピードで経済回復を果たすと考えるものの、ロックダウンがこのまま長期化した場合の経済下振れリスクも見逃すことが出来ず、相場を読むうえで非常に難しい局面となっている。デルタ株の世界的な流行拡大を受けて、7月中旬には金融市場全般的にリスクセンチメントが悪化していたが、足元悲観ムードがやや後退した印象を受ける。ただ、ここきて世界的な景気減速を意識するようなエコノミストの意見が散見されるようになってきており、このまま株価が上値を追い続けられるかどうかは不透明。

外部要因からの影響もさながら、豪ドルはシドニーロックダウン解除の見通しが立つまで、上値の重い展開を予想する。

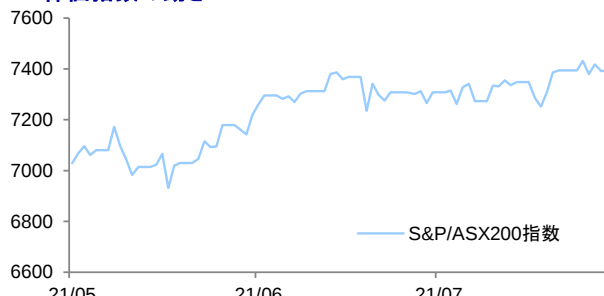
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
7/1	貿易収支
7/5	小売売上高(前月比)
7/6	RBAキャットシュート
7/15	非常勤雇用者数変化
7/15	正規雇用者数変化
7/15	雇用者数変化
7/15	参加率
7/15	失業率
7/28	CPI(前期比)
7/28	CPI(前年比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
5月	AS\$10500m	AS\$9681m	AS\$8157m
5月 F	0.1%	0.4%	0.1%
6月	0.1%	0.1%	0.1%
6月	-	-22.5k	17.7k
6月	-	51.6k	97.5k
6月	20.0k	29.1k	115.2k
6月	66.2%	66.2%	66.2%
6月	5.1%	4.9%	5.1%
2Q	0.7%	0.8%	0.6%
2Q	3.7%	3.8%	1.1%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2200 ~ 1.2800
CAD/JPY 84.00 ~ 90.00

米州資金部カナダ室 金本玲子

■ 先月の為替相場

7月のUSD/CADは1.2437でオープン。月間安値は1.2303(7/6)、月間高値は1.2807(7/19)。OPECプラス会合の影響やコロナ変異株による世界経済減速への懸念などにより、7月初旬まで上昇が続いていた原油価格が下落。それに伴いUSD/CADも1.23台から一時1.28台まで上昇。月後半は原油価格が安定し、USD/CADは1.25周辺での取引が続いた。

6日、USD/CADは1.23台から1.2486まで上昇。OPECプラスにおける減産延長を巡る協議停滞を受け、一部の産油国が供給量を増やすとの懸念が高まり、1バレルU\$77近くまで上昇していた原油価格(WTI)はU\$73台まで下落。7日は引き続きOPECプラスの協議決裂が供給増加につながるの見方により、WTIはさらに1バレルU\$71台へ下落。午後に公表された6月分のFOMC議事録は、テーパリングの時期について具体的な言及がなく、USD/CADに大きな影響はなかったものの、WTIの下落が続く。翌日8日、USD/CADは1.2590まで上昇。9日、カナダ6月の雇用統計は、雇用者数が前月比23.07万人増と市場予想の17.5万人増を上回った。外出制限解除によるサービス部門の改善が牽引し、3ヶ月ぶりの上昇となった。失業率も前回の8.2%から7.8%へ低下。ややカナダドル買いが進みUSD/CADは1.2447でクローズ。14日、カナダ中央銀行は市場予想通り、政策金利を0.25%に据え置き、国債の買い入れについては週30億カナダドルから20億カナダドルへの縮小を決定した。この発表と同じ頃、アラブ首長国連邦(UAE)が協議減産縮小に関してサウジアラビアと合意したとのヘッドラインを受け、1バレルU\$75台まで戻っていたWTIが再度下落。USD/CADは上昇を続け、15日には1.26を突破。18日、OPECプラスの閣僚級会合で、UAEとサウジアラビアの対立が解消、8月からの協議減産の縮小が決定。これを受けて19日には、WTIは1バレルU\$65.70まで急落。また、コロナ変異株の世界的な感染拡大による世界経済減速への懸念が高まり、カナダドル売りが加速。USD/CADは1.26台から1.28台へ急伸。21日以降はWTIが1バレルU\$70を回復、安定したことから、カナダドルが買い戻され、USD/CADも1.25台まで戻す。27日まではFOMCや主要経済指標発表を前に大きな動きはなく、USD/CADは1.25-1.26での取引が続いていたが、28日のFOMCでテーパリング時期の後退が意識されたことからドル売りが進み、USD/CADは下落。29日もドル売りの流れと、米原油在庫減少によるWTIの回復が継続しUSD/CADはさらに下落、1.2448でクローズした。

■ 今月の見通し

8月のUSD/CADは1.22-1.28での推移を予想。6月から段階的に進んでいる経済活動の制限解除は、ワクチンの順調な普及とともに、7月中も順調に進んだ。7月23日時点で、12歳以上でワクチンを一回接種した人の割合は79.66%、二回接種が完了した人の割合は57.45%となっている。集団免疫が獲得できると言われているワクチン普及率70%の水準に近付きつつあり、以前のような厳しい外出制限が再び適用される可能性は低いと考えられる。7月5日発表のカナダ中央銀行による第2四半期Business Outlook Surveyによると、カナダ国内企業の景況感は改善が続いており、大半が前年同期比で売上高が改善すると予想、それに伴い投資や雇用も拡大していく見通しが明らかとなった。またカナダ6月の雇用統計にも改善が見られたように、今後経済活動が正常化する中で、第3四半期中には雇用もコロナウイルス前の水準に戻ると予想される。カナダ5月の小売売上高も、外出制限中にもかかわらず市場予想より下げ幅は小さく、6月以降は増加に転じると見込まれている。コロナウイルス感染の収束が見られ、労働市場の堅調な回復が続けば、カナダ中央銀行は10月にも国債買い入れ額のさらなる減額を実施、年内にこのプログラムを終了する可能性が高く、2022年には利上げに向けて動いていくと見られ、Bloombergのサーベイによると2022年後半の利上げが広く予想されている。

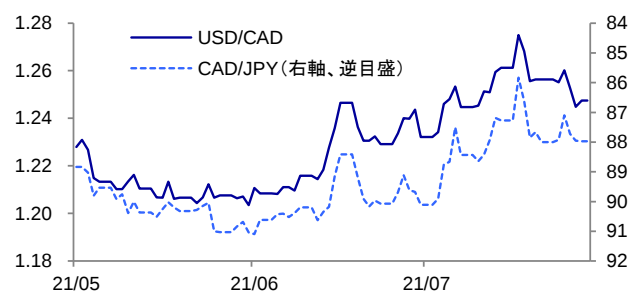
原油価格に関しては、OPECプラス産油国の動向により一時的な上昇、下落が続く可能性は考えられるが、基本的に世界経済は回復の流れに向かっており、WTIは1バレルU\$65-75での推移を見込む。米国をはじめ、コロナ変異株による新規感染者が増加している国も見られる状況から、リスクオフの動きが優勢となった場合カナダドル売りが進み、USD/CADが1.28近くまで上昇する局面は考えられる。しかし主要先進国と比べても、カナダ経済は順調な回復が進んでいると見られ、利上げへの見通しも整っている状況から、カナダドルも堅調に推移すると考えられ、8月のUSDCADは1.22-1.28での推移を予測する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のランチ事情』
ランチはカナダでも日本と同じように家から持参する人、買ってオフィスのランチルームで食べる人、レストランに行く人など様々です。仕事や会社にもよると思いますが、お昼休みを決まった時間に一斉に取るのではなく、それぞれが仕事の合間にランチを取るのが一般的だと思います。個人的には家から夕食の残りを持参したり、簡単なサンドイッチなどを持って行ったり、それ以外はフードコートで買ったりしていました。家から持参するお弁当という、かわいなお弁当箱に彩りの良いおかずの入っているイメージがあるかもしれませんが、カナダのカレッジやオフィスで多くの人が持ってきているのは、タッパーに入った簡単な食事や、ジップロックに入れたサンドイッチや果物です。夏の天気の良い日はレストランのテラス席でのランチは気分転換になり、気持ちいいと思います。ビルの中やモール、地下街にはフードコートがあり、ギリシャ料理、中東料理、インド料理、日本食、中華、バーガーなど、ランチの選択肢は色々あります。ただ基本的にカナダの都市部での物価は日本より高いため、ランチも結構高いなあと感じます。トロントのダウンタウンでの例になりますが、最低でもC\$12くらいは払うことになります。ただボリュームもかなりあるので、人によっては1.5食分くらいになるかもしれません。ワンコインランチやコンビニのリーズナブルなお弁当もなく、ファストフードのセットもC\$10くらいはするので、安くおなかをいっぱいしたいければ、ビザがおすすめです。1/4カットの大きな1スライスがC\$6くらいで買えます。

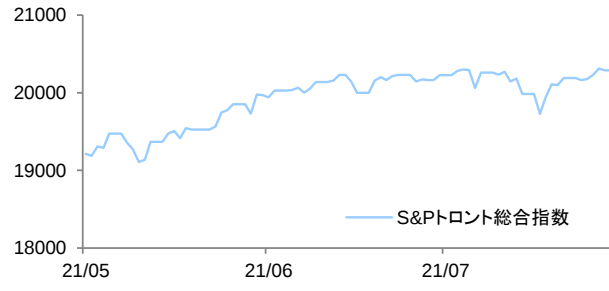
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	貿易収支	5月	0.44b	-1.39b	0.46b
7/2	マークイットカナダ製造業PMI	6月	-	56.5	57.0
7/9	ネット雇用者数変化	6月	175.0k	230.7k	-68.0k
7/9	失業率	6月	7.8%	7.8%	8.2%
7/14	製造業売上高(前月比)	5月	1.0%	-0.6%	-2.1%
7/14	カナダ中央銀行政策金利決定会合	-	0.25%	0.25%	0.25%
7/23	小売売上高(前月比)	5月	-3.0%	-2.1%	-5.6%
7/28	CPI(前月比)	6月	0.4%	0.3%	0.5%
7/28	CPI(前年比)	6月	3.2%	3.1%	3.6%
7/30	GDP(前月比)	5月	-0.3%	-0.3%	-0.5%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1130	～	1170	(注)100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	9.434	～	9.804	
	JPY/KRW	10.200	～	10.600	

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

7月のドル/ウォン相場は上昇した。6月30日のドル/ウォンは1,126.0でクローズしていたものの、新型コロナデルタ変異株の感染拡大を受けて、1,132.0にてオープン。2日海外時間に発表された米6月非農業部門雇用者数が良好だったこと等あり、リスクオンムードになったことから、5日にドル/ウォンは1,131.8にてオープンした。その後、6日海外時間に入ると英国での新型コロナデルタ変異株の感染拡大が取りざたされたほか、OPEC+での協調減産協議の決裂等あり、原油価格が乱高下したことを受け、市場はリスクオフムードに。7日海外時間に発表されたFOMC議事要旨には、「一段と顕著な進展」の基準には雇用が達していないとした一方で、今後も進展は続くことと記述されており、従来のFRBの主張と一致していることから市場への影響は限定的。9日にかけては新型コロナデルタ変異株感染拡大が意識され続け、韓国政府が12日から首都圏の防疫措置レベルを最高値まで引き上げると発表するとドル/ウォンは1,150.0まで上昇した。13日海外時間に発表された米6月CPI(実績:前月比+0.9%、予想:同+0.5%)が非常に強い結果となると、パウエルFRB議長の講演を前に早期のテーパリング懸念への警戒感が広がり、14日にドル/ウォンは1,151.9まで上昇した。しかし、1,150ウォンを越える水準では実需のウォン買いが入り、ドル/ウォンの上値が徐々に重くなると、14日海外時間のパウエルFRB議長の講演が市場予想以上にハト派色の強い内容だったことでドル売りとなり、ドル/ウォンは下落。さらに15日BOK会合では基準金利は据え置きとなったものの、利上げを出張する委員が1名いたほか、BOKが今年の韓国成長率見通しを4.0%に維持したことが原因で韓国国債金利が急上昇し、ドル/ウォンは1,138.6ウォンまで下落した。19日になると、再び新型コロナデルタ変異株の感染拡大を受けてドル/ウォンは上昇。さらにWTIの急落等あり、市場のムードが悪化すると、21日にドル/ウォンは1,153.8まで上昇した。28日には中国当局による規制強化を受け株式市場が急落すると、ドル/ウォンは月高値1,157.3まで上昇。しかし、29日にハト派色の強い内容となったFOMCを通過すると、月末の実需のウォン買いもあり、一転してドル/ウォンは1,143.7ウォンまで反落。しかし、外人投資家による株売りが継続する中、実需のウォン買いが落ち着くとドル/ウォンは再び上昇した。結局、先月末対比24.2ウォン高の1,150.3でクローズ。

■ 今月の見通し

8月のドル/ウォン相場は方向感に乏しい展開を予想する。7月は世界的に新型コロナデルタ変異株の感染が拡大し、欧州を中心に行動制限が入る中、リスクオフムードとなりドル/ウォンは上昇する展開となった。一方で、7月会合で韓国中銀は韓国での景気回復や今後の金融政策への余裕を持たせるために、年内での利上げ(韓国中銀曰く、正常化)を示唆したものの、6月からスタンスはほとんど変化していない。FEDについても米国内の雇用や経済が、テーパリング開始基準に達するのはまだ先とのスタンスを維持しており、ドル/ウォン相場への影響は限定的なものにとどまっている印象だ。今月のドル/ウォンの注目材料は以下の3つ。
①8月ジャクソンホール講演でのFEDの金融政策変更②新型コロナウィルスのデルタ変異株による影響③韓国中銀による利上げ時期の示唆
①市場は、6月FOMCにて足元の経済や雇用はテーパリング開始の基準となる目標まで距離があると示されたことでテーパリング開始まではまだ時間があると認識している。その後デルタ変異株の感染が広がったことや米経済指標の回復が失速しつつあることを鑑みると、8月のジャクソンホールでパウエルFRB議長がテーパリング開始まで近い印象を持たせる発言をする可能性は低いだろう。しかしながら、目標達成時期に関するより具体的なヒント(インフレや雇用の目安等)を出す可能性もあり、引き続き注目イベントとなろう。
②足許では新型コロナウィルスのデルタ変異株の感染が広がりつつあり、6月はリスクオフ要因となったものの、米国では経済活動への本格的な制約にまでは至っていない。デルタ変異株の感染拡大を材料としたポジション調整も相応に入ったことから、一段のリスクオフ材料にはなりにくいのではなかろうか。
③7月BOK会合で理事1名が利上げを主張したことで話題となっている。8月会合ではさらに利上げを主張する理事が増加すると見られており、ウォン買い材料となろう。
かかる状況下、8月のドル/ウォンの上昇は一旦小休止になると予想する。
①、②はドル買いの有力な材料ではあるものの、足許では米経済指標が失速する中FEDがさらに強いスタンスをとるには材料不足。デルタ変異株の感染拡大についても相応に織り込んでおり、6、7月で続いたドル買いは一旦小休止となるのではなかろうか。

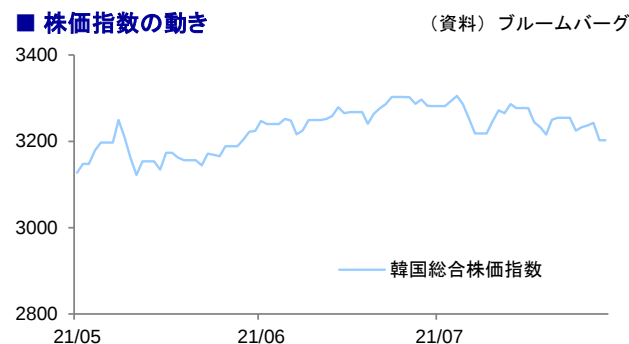
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

韓国のランチ事情ですが、日本ほどではないもののソウルには各国のフードがそろっています。韓国で人気な日本食はどこにでもありますし、中華料理、東南アジア系、インド系に至るまで、食べたいものを選ぶことができる状況です。また、ファストフードについてもマクドナルドは勿論のこと、シェイ○シャックや、モ○バーガー、バーガー○ング等バリエーション豊かな状況です(余談ですが、韓国ではロッテリアがいたるところにあります。やはりロッテ系列が強いところは韓国らしさかもしれません)。ランチ事情で特筆すべきことがあるとすれば、韓国系食堂の注文の仕方もかもしれません。韓国系の食堂は、小型店舗で専門店が多いので料理の種類が多くありません(例えば、カルビタン屋さんの場合、辛いカルビタンと普通のカルビタンだけしかないと考えていただけるとよいかと思います)。中には、メニューが一つしかない店があります。そのような店では席についてもメニューを開かれることはありません(注文するものが決まっているので聞く必要がないです)。こういった場合、席に座ると同時に料理が出てきます。決まった料理を黙々と食べ、お会計も店員から何も聞かずに行われ、そのまま店を後にする、究極にシンプルなランチタイムが繰り返されます。そんな寂しいランチでは満足できない韓国人はその後コーヒーを買って談笑する時間を取ります。究極まで回転を上げるべく、すべてのおペレーションをそぎ落とした食堂と、そこで満足できない人が通うように作られたコーヒーショップの共存が図られているのが韓国の現状になります。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	輸出(前年比)	6月	33.8%	39.7%	45.6%
7/1	輸入(前年比)	6月	33.6%	40.7%	37.9%
7/1	貿易収支	6月	\$4,900	\$4,441m	\$2,943m
7/2	CPI(前年比)	6月	2.5%	2.4%	2.6%
7/14	失業率	6月	3.8%	3.7%	3.8%
7/27	GDP(前期比)	2Q	0.8%	0.7%	1.7%
7/28	消費者信頼感	7月	-	103.2	110.3
7/30	景況判断(製造業)	8月	-	92	99
7/30	景況判断(非製造業)	8月	-	78	82
7/30	鉱工業生産(前年比)	7月	9.6%	11.9%	14.9%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 27.80 ~ 28.25
TWD/JPY 3.90 ~ 4.00

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

7月のドル/台湾ドルは、外国人投資家の動向に左右され、揉み合う展開に。

月初のドル/台湾ドルは27.900でオープン後、外国人投資家が台湾株を売り越したことや、雇用統計を前にドルが強含む場面もあり、一時28ちょうどをタッチ。しかし、米雇用統計の結果を受けて米株式市場が上昇したこと台湾株も上昇すると、台湾ドルも買われ、7/5には27.854まで下落。その後も台湾株の上昇は続き、台湾加権指数が初の18,000ポイント台を付けたが長続きせず、利益確定の動きや、外国人投資家が台湾ドル売りに転じると、ドル/台湾ドルはじりじりと上昇。さらに新型コロナウイルスの感染再拡大の懸念からリスクオフの動きが広がると、7/8には28台に入り、7/9には28.08付近まで上昇。

月央に入ると、一旦リスクオフの流れが後退したため、台湾株が買い戻されるとドル/台湾ドルは27.99付近まで下落。7/15には最高値を更新する台湾加権指数につられて、海外からの資金流入が拡大し、ドル/台湾ドルは一時27.87付近まで下落した。しかし、その後米国のハイテク株が売られると、台湾株も下落し、ドル/台湾ドルは28台に戻された。

月後半に入ると、新型コロナウイルスの感染再拡大の懸念からの再びリスクオフの流れとなり、台湾株・台湾ドルともに売られ、7/20には一時28.106をつけたものの、28.10台では輸出企業のドル売りも入って上値は押さえられた。その後は台湾株が買われる場面では、一時28を割り込むこともあったものの、台湾株は軟調に推移したため、ドル/台湾ドルは28台での推移が続いた。ただし、7/26以降、中国での規制強化の発表を受け、中国・上海株が下落した影響で台湾株が続落した際には、ドル/台湾ドルは月末であったことから輸出企業のドル売りが上値を押さえ、中国株の下落が落ち着くと台湾株も落ち着きを取り戻し、27.95付近で推移した。

■ 今月の見通し

8月のドル/台湾ドルはレンジでの推移を見込む。

足許は外国人投資家の動向に左右される展開が続いている。要因は好調な米株につられる場合もあれば、コロナや中国関連でのリスクオフの流れ等まちまちである。一方、台湾経済は、2021年の第2四半期GDP速報値は7.47%と、台湾域内での本格的な域内感染が拡大したものの、高い成長率を維持している。しかし、好調な輸出に支えられて出来上がった数字ではあり、民間消費はマイナスとなり、感染拡大による警戒レベルの引き上げの影響が出ている。

8月については、域内の感染も落ち着き警戒レベルの引き下げが行われたことや、台湾国内のワクチン接種率が徐々に引きあがる中、台湾においてはリスクオフの流れは落ち着きやすい状況となるであろう。しかし、世界的には感染拡大傾向にあり、株価の動向は不安定となり、つられてドル/台湾ドルも上下すると見込む。

足許の輸出の状況は引き続き好調ではあるが、外国人投資家の動向に左右される状況は続くであろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のランチ事情』

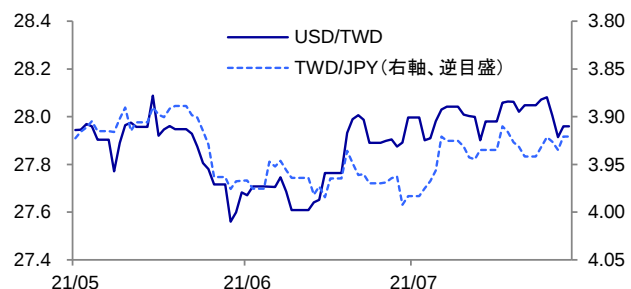
直近は5月に域内でのコロナ感染者数が増加し、警戒レベルが引き上げられたことにより、台北では店内の飲食が禁止されており、ランチも持ち帰りが主流になっています。

しかし、コロナ前から外食文化があり、以前から持ち帰りや宅配サービスがあったため、どの飲食店もスムーズに移行しているように見えます。

ご飯ものから麺類まで持ち帰りが出来ますが、ちなみに台湾式のお弁当では、ご飯の上におかずが全部乗っかっているものをよく見かけます。(例えば、鶏肉のソテーと温野菜がご飯の上に乗った丼をイメージしていただければ分かりやすいです)。個人的には台湾式より、日本式の仕切りが分かれて色んなおかずが入っている方が好きです。

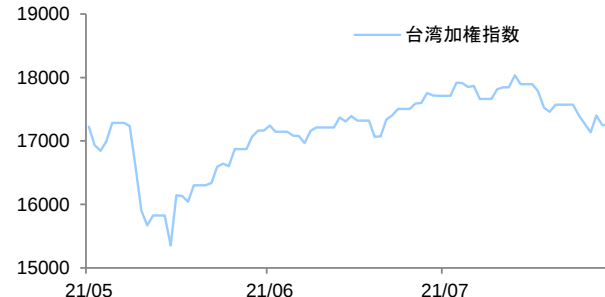
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	外貨準備高	6月	-	543.28B	542.98B
7/7	CPI(前年比)	6月	2.25%	1.89%	2.48%
7/7	輸出(前年比)	6月	33.0%	35.1%	38.6%
7/7	輸入(前年比)	6月	34.5%	42.3%	40.9%
7/7	貿易収支	6月	5.70B	5.15B	6.16B
7/20	輸出受注(前年比)	6月	30.0%	31.1%	34.5%
7/22	失業率	6月	4.25%	4.76%	4.15%
7/23	鉱工業生産(前年比)	6月	12.50%	18.37%	16.88%
7/30	GDP速報値	2Q	6.65%	7.47%	8.92%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7700 ~ 7.8000
HKD/JPY 13.80 ~ 14.40

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【7月の香港ドル直物相場】

7月の香港ドル直物相場は、中国当局による民間企業への規制強化に対する不透明感が広がる中、市場心理の悪化と資金流出圧力の高まりを背景に、一時7.78台半ばまで弱含んだ。その上、強力なデルタ株の感染拡大がワクチンの普及効果を弱めており、今後の世界経済の回復と成長見通しに影を落としている。香港の株式市場における強い資金流出圧力はIPO市場にも影響しており、IPO関連の資金流入減少が香港ドル相場の重石となっている。26日にはインターネット企業を対象にした独占禁止法の順守を取り締まると発表し、国内外の投資家が香港に上場している中国ハイテク企業関連株を売却。本土投資家からの投資資金引き上げにより、7月下旬のストック・コネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)による香港株式市場への資金流入額は約4,200億香港ドルに縮小した。ハイテク以外の業種についても、脆弱な市場心理の影響を受け売り圧力に晒された。米国連邦準備理事会(FRB)がタカ派に転じたことを受けて、1か月物の香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差がマイナスで推移していることも、香港ドル直物相場の下落材料となった。しかしながら、マクロ経済に目を向けてみれば、香港の6月の失業率は5.5%と、前月値である6.0%から低下した。香港内でのウイルスの感染拡大も抑制されていることから、引き続き香港のマクロ経済見通しは改善している。

【7月の香港ドル金利市場】

HKMAのアグリゲートバランスの残高は過去最高水準の4,575億ドルを維持しており、香港ドルの流動性状況は潤沢な状況が続いている。香港ドルHIBORは1か月物で0.07%、3か月物で0.15%近辺まで低下。デルタ株の感染拡大に伴い、市場参加者が織り込んでいるFRBの利上げ開始時期は後退している。米ドルベッグ制の下、香港ドル金利についても利上げ織り込み後退による低下圧力がかかり、6月末時点では0.5%近辺であった3年物香港ドルスワップ金利は7月末で0.4%近辺まで低下した。FRBは市場への流動性供給を続けると思われる為、対香港ドルにおける米ドル需要は弱く、5年物香港ドルベシススワップはゼロ近辺に留まっている。

■ 今月の見通し

【8月の香港ドル直物相場】

8月の香港ドル直物相場は、7.77から7.80のレンジ内での推移を想定する。中国の規制リスクが再認識され、海外の投資家は香港上場の中資系企業への投資額を一段と減らす可能性が高い。対中関連投資の巻き戻しに伴う資金流出圧力が高まっていることから、当面は香港ドルが弱含む状況が続くと予想される。デルタ株の感染が拡大しているものの、米国では国内の消費者物価指数が大幅に上昇してきた為、FRBは8月下旬のジャクソンホール・シンポジウムでテーパリングに関する計画を明らかにする可能性がある。米ドル金利の上昇期待を受けて1か月物の香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差がマイナスとなっていることも、香港ドルの下押し圧力として残るだろう。中国企業による配当金送金(人民元売り/香港ドル買い)が8月に一巡することに加え、香港の株式市場では市場心理が悪化しており、本来は香港ドルの下支えとして働くIPO関連の資金フローも期待できそうにない。

【8月の香港ドル金利市場】

8月の短期の香港ドル金利は、潤沢な流動性を背景に低水準での推移が継続するだろう。今後も中国の規制リスクを発端とした海外の投資家による対中関連投資の引き上げが進み、資金流出圧力に拍車をかける可能性がある。市場心理が悪化していることからIPOに関連した資金調達圧力も限定的となることが予想される為、短期金利に上昇圧力がかかる可能性は低い。市場心理が悪化する中、HKMAが為替基金証券(EFBNs)の発行を通じた香港ドルの吸収に動くとも思えない。また、香港の消費者物価指数の上昇率は、中国本土での食品価格下落が重石となり引き続き抑制される見通しである。デルタ株の感染拡大に伴い、米国のテーパリングや利上げ開始時期が後ろ倒しになる可能性も意識されている為、米ドル金利に追隨する香港ドルスワップ金利の上昇余地は引き続き限定的だろう。

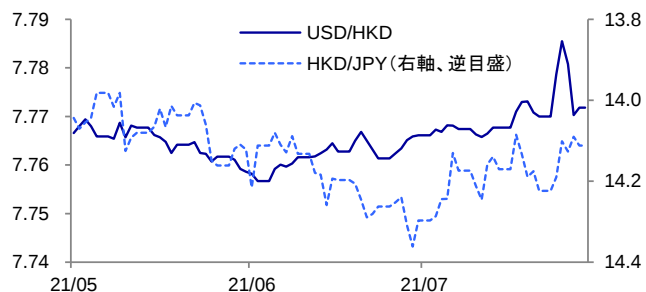
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港のランチ事情』

香港ではお昼休みが比較的短い為、お弁当をオフィスに持参する人が多いです。また、時間短縮の為、ちょうどお昼休みに受け取れるよう、朝の内に宅配のお弁当を注文しておく人もいます。便利ですが、種類が多いわけではない為、週に数回同じお弁当を食べることになります。香港のオフィスでは、全員が不在になることが無いように、お昼休みを前半・後半のシフト制で運営しています。前半のシフトは11時30分からですが、ほとんどのレストランではランチタイムが12時からとなっており、いくつかのレストランでは遅めのモーニングメニューを注文するしかありません。後半のシフトは12時半からとなるものの、ちょうど混み始める時間の為、少しの間待つ覚悟が必要でしょう。時間が限られていることもあり、テイクアウトして自席で食事をする人が多いです。

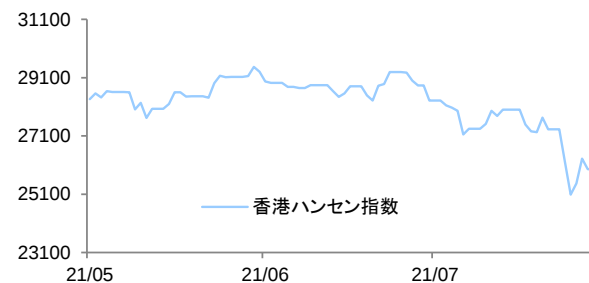
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/30	小売売上高 (価額、前年比)	5月	6.9%	10.5%	12.1%
7/1	日経香港PMI	6月	-	51.4	52.5
7/7	外貨準備高	6月	-	\$491.6b	494.5b
7/20	失業率(季調済)	6月	5.8%	5.5%	6.0%
7/26	CPI(コア・ジット(前年比))	6月	1.2%	0.7%	1.0%
7/26	輸出 (前年比)	6月	26.0%	33.0%	24.0%
7/26	輸入 (前年比)	6月	26.1%	31.9%	26.5%
7/26	貿易収支 (HKD)	6月	-40.5b	-40.5b	-25.5b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.4000	～	6.7000
	CNY/JPY	16.20	～	17.90
	100JPY/CNY	5.5600	～	6.1500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

7月のドル人民元為替相場(USDCNY)は月末に大きく上下。

1日、USDCNYは6.46前半で取引を開始。2日、中国株の下落を背景に6.48台半ばまで上昇。夜発表された米雇用統計の結果を受けてドル売りへ。

5日、6.47近辺で取引を開始。主要通貨に対してドルが売られる流れが続いたが、6.46を下抜けるには至らず。6日夜、欧米の重要経済指標が予想を下回る結果となったことでリスクオフによるドル買いから6.47台後半へ。7日の日中は元買いが優勢となったことから上昇を打ち消すも、同日夕方、国務院会合で追加の金融緩和策実施が示唆されたことで再びドル買い売り転じ8日夜には6.49台を示現。9日の夕方、中国人民銀行(PBoC)は預金準備率の引き下げを発表。市場は金融緩和を織り込んでいたことから、発表後6.49レベルから6.48レベルへ下落した。

12日、6.47台半ばで取引を開始し同水準での落ち着いた値動き。13日、貿易統計が予想を上回る結果となったことが好感され6.46台まで元高が進んだが、夜間に発表された米CPIが予想を上回ったことからドル買いが優勢となり6.47台半ばまで上昇。14日、パウエルFRB議長の議会証言がハト派な内容と捉えられたことからドル安が進み、一時6.44台後半まで下落。夜間のうちに下げを取り戻し6.47付近まで上昇も、15日のGDPを始めとする主要統計の結果が好感され再び元高推移。16日夜、米小売売上高が堅調な結果であったことから、ドル買いへ。

19日、6.47台後半でオープン。ドル買いが続く6.49レベルまで上昇。20日、注目されていた中国貸出プライムレートが据え置きとなったことから、追加緩和期待が後退し元高の流れとなった。同日日中は6.48付近まで、22日には6.46半ばまで下落したが、その後は反転上昇。

26日、USDCNYは6.48レベルでオープン。27日、教育産業やテクノロジー企業に対する規制を強化するとの報道を受けて上海株が下落する中、USDCNYも6.51台前半へ急上昇し、約3か月振りの水準をつけた。28日の日中も6.50台での推移が続いたが、株が下げ止まったことが好感されUSDCNYの元売り圧力は弱まり徐々に下落。28日夜の米FOMCでは米国経済の回復は順調であるとの見方や資産買入規模縮小の議論が行われたことが示された一方で、パウエル議長の発言が引き続きハト派であった。FOMC後もドル売りは続き、29日、6.45台を示現。

■ 今月の見通し

8月のUSDCNYはレンジ継続も上昇圧力の高まる展開を予想。

PBoCが預金準備率引き下げを行ったことで、必要に応じて金融緩和を行う姿勢が明確になった。また、月末の元安進行局面では、中国の規制リスクにより海外投資家の資本流出が目立ち、これまで元高見通しの主因としていた海外投資家の資本流入フローが弱まることとなった。米国との緊張感も高まりつつある。これらはいずれも元安材料となっている。

経済指標については、前回発表されたGDPをはじめとする主要経済指標は比較的堅調な結果となったが、PBoCの金融緩和スタンスから見られるように下半期の経済見通しは上半期に比べて足踏みするとの見方が多い。

一方、米国では7月のFOMCにおいて、米経済の回復は順調との見方が示され、テーパリングに向けた議論が前進しているが、パウエル議長の見解は金融政策正常化に向けては慎重な姿勢を継続している。為替相場においてはドル高に転じるきっかけをつかめていない状況。

ドル安・元安双方の材料があるため、基本的には6月後半から続いている大きなレンジ相場が継続すると考えるが、どちらかといえば上昇圧力の高まりに意識しておきたい。ただし、中国の経常収支は黒字が続いていることや、中国国債のグローバルインデックス採用による資本流入フローが今後も見込めることから、長期的な元高要素は引き続き元買い材料として残るものと考えらる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のランチ事情』

上海のランチタイムは日本と大きく変わらない印象です。毎日お弁当を持参している人もいますし、外へ食べに行く人もいます。

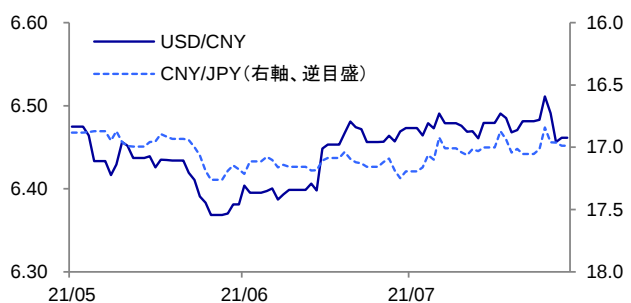
私がお弁当を食べる時によく利用しているのは、オフィスの自席でメニューを注文し、注文完了通知を受け取ったらお店まで取りに行く方法です。これだと料理ができるまで待っている感覚がなくお店に行ってもすぐにテイクアウトができるので便利です。飲食店のネット注文が発達しているため、日本よりもこの方法で対応しているお店が圧倒的に多いかと思います。

もちろんデリバリーも可能で、オフィスビル1階にあるデリバリー専用のお弁当置き場まで届けてもらうこともできます。ただ、ピーク時や天候によっては1時間待ちとなることもあるのでお気をつけください……。

ちなみに、人民元オンショアマーケットは中国時間11時半から13時半の間は流動性が極端に落ちます。ランチタイムはディーリングルームの人も減るためこの時間のディーリングは避けていただくことをおすすめします。

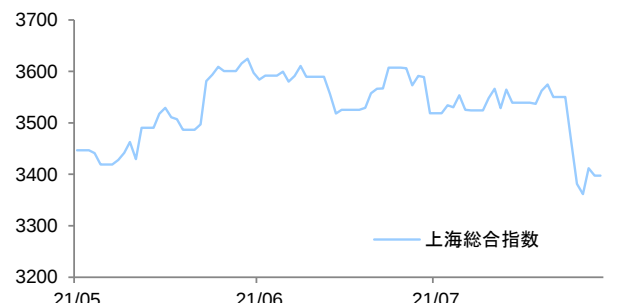
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/30	非製造業PMI	6月	55.3	53.5	55.2
6/30	製造業PMI	6月	50.8	50.9	51.0
7/1	財新・製造業PMI	6月	51.9	51.3	52.0
7/5	財新・サービス業PMI	6月	54.9	50.3	55.1
7/9	CPI(前年比)	6月	1.2%	1.1%	1.3%
7/9	PPI(前年比)	6月	8.8%	8.8%	9.0%
7/13	貿易収支	6月	\$44.7b	\$51.5b	\$45.4b
7/15	鉱工業生産(年初来/前年比)	6月	16.0%	15.9%	17.8%
7/15	小売売上高(年初来/前年比)	6月	22.8%	23.0%	25.7%
7/15	GDP(前年比)	2Q	8.0%	7.9%	18.3%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3200 ~ 1.3800
SGD/JPY 79.00 ~ 83.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2021年07月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD安が進行。

月初のUSD/SGDは1.34台半ばの水準でスタート。前月末の流れを引き継ぎ、SGDは月初よりじり安に推移。2日にかけて1.35台前半の水準までSGD安が進行。強弱入り混じる米雇用統計の結果を受けて量的緩和縮小への警戒感が後退し、米金利が低下する中、SGDは反発。6日のUSD/SGDは1.34台前半の水準までSGD高が進行した。

月半ばにかけてSGDは軟調推移。米6月CPIが市場予想を大幅に上回り、米株安・金利上昇の流れとなるなか、SGDはじり安に推移。一時1.34台前半で推移していたUSD/SGDは、世界的な株価持ち直しや米金利上昇、アジア域内でのコロナ感染者数が増加する等の要因が相まって、21日にかけて1.36台後半までSGD安が進行した。

28日、注目の米FOMCを控えアジア通貨は小動き。人民元が小幅に反発する動きを見せる中、SGDも上昇。その後、注目のFOMC後の会見において、パウエルFRB議長が量的緩和の縮小開始に向けて「今後複数の会合で経済情勢の進捗を確認する」と表明。ハト派姿勢を改めて示した。こうした動きの中、翌29日以降もアジア通貨は大半が上昇。USD/SGDもじりじりとSGD高が進行し、1.35台半ばの水準で推移している(29日時点)。

■ 今月の見通し

2021年08月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD安の進行を予想。

前月の本欄にて、SGDは米国の金融緩和縮小期待により一時的に安くなる瞬間もあろうが、域内の経済回復を要因に年内にかけては堅調に推移する旨の予想をしたが、7月はSGDにとっての不安材料が増した月であった。

まずは中国の金融規制強化。バスケット制であるSGDにおいて人民元は高い比率を占めると弊行では分析しており(約2割ほど)、中国発の金融規制強化により金融市場の混乱が見られる場合、人民元安に連れSGDにも売り圧力が加かろう。

二つ目は、域内における予想以上の感染者拡大と対策の遅れである。インド、インドネシアに並びタイも感染者の増加に歯止めが掛からず、シンガポールも7月に実施されたPhase2 HAを再始動し規制強化を図る等、ワクチン接種の拡大と共に描かれていた経済復興のイメージから乖離が生まれてきている。

加えて、今後は8月にジャクソンホール会見、9月FOMCと米国の金融緩和縮小に向けた更なるヒントが発せられるイベントが控えており、仮に同一イベントにおいて米国のテーパリング期待が高まった場合、アジア域内の経済復興の鈍さも相まって、SGDは軟調推移となろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のランチ事情』

シンガポールにはホーカーと呼ばれる屋台街が多くあります。日本の『路上にリアカーとパイプ椅子を置いてラーメン』の様な屋台とは異なり、建物の中に数多くの店舗が軒を連ねているもので、日本の商業施設にあるフードコートに近いものになります。

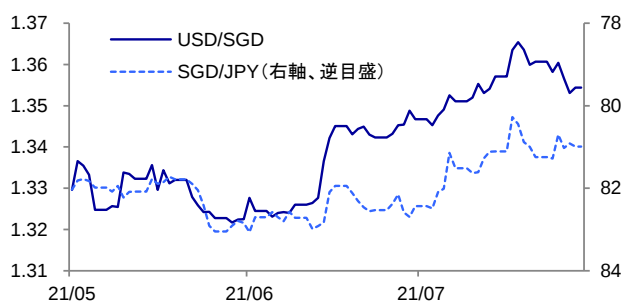
シンガポールのホーカー文化は昨年ユネスコ無形文化遺産に登録されており、自炊しない方も多いこの国で庶民の台所となっています。そのため「安い・早い・うまい」の三拍子揃ったものが多い上、多くの人種の方が生活するこの国らしく種類も様々。中華料理・マレー料理・インド料理等が多いですが、どこの国の料理なのか見当もつかないものもあつたりします。

弊行シンガポールオフィス近くにもホーカーが数か所あり、ランチによく利用しています。ただ、私のようなビギナーが一人で行く数十件のお店が並ぶ中で、オーダーの仕方すら分からないものも多く、結局は定番のシンガポールチキンライスやワントンメン(日本の物とは異なり、甘い汁なし麺)等にしてしまいがちに、そんな中、最近では当地でも新型コロナ感染拡大の影響を受け外食が禁止されており、現地スタッフがチームメンバーのランチを買いに行ってくれているため、初めて食べるものも多く外出が制限される中での数少ない楽しみの一つとなっています。私の最近のお気に入りには「麻辣香鍋(マラーシャングォ)」、肉や野菜、魚介類など好みのものを選ぶとそれを唐辛子やニンニクなどと炒めてくれるもの。食後のニンニクの臭いが気になりますが、マスクをしているので周りに迷惑はかけていないと信じておいしくいただいています。

(アジア・オセアニア資金部 綱島正佑記)

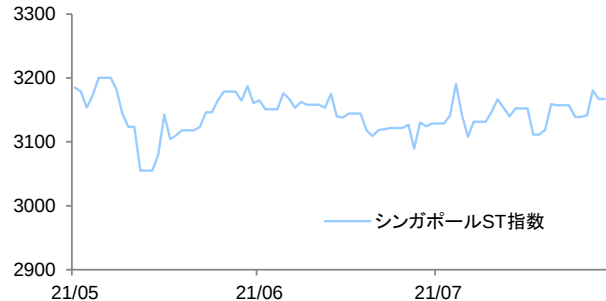
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	購買部景気指数	6月	50.7	50.8	50.7
7/5	小売売上高(前年比)	5月	65.0%	79.7%	54.0%
7/14	GDP(速報値)	2Q	14.8%	14.3%	1.3%
7/16	非石油地場輸出(前年比)	6月	8.0%	15.9%	8.6%
7/23	CPI(前年比)	6月	2.5%	2.4%	2.4%
7/26	鉱工業生産(前年比)	6月	27.2%	27.5%	27.0%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.70 ~ 33.50
THB/JPY 3.30 ~ 3.35

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木一勲

■ 先月の為替相場

7月はタイ国内の新型コロナ感染拡大の深刻化によりドルバーツが大きく上昇。月初、32バーツ近辺で取引を開始し、米6月雇用統計を前に発表された経済指標が良好だったため期待感からドル高が進むも、弱めの米6月雇用統計を受けて上げ幅を縮小。2週目にはタイ国内でのコロナ感染拡大が嫌気され再びドル高・バーツ安に。グローバルに株式市場が大きく下落する中、センチメントが急速に悪化する中で32.50台をつけた。中旬、12日より首都バンコクや感染拡大が懸念されている県を対象にロックダウンが再開されたほか、タイの大手石油精製会社が欧州の会社をEUR4,000M規模で買収するとの報道もあり、THB売りが意識され易い地合い。13日の米6月CPIは前月比で約13年ぶりの伸びを見せたが、パウエルFRB議長の議会証言ではインフレが一過性との見解や動向を注視していくというこれまでと変わらないハト派な印象を市場に与えたため、ドルバーツの上昇は小休止。しかし、タイ国内の新規感染者数が過去最高を更新し続け、良好な米6月小売売上高が発表されると、ドル買い・バーツ売りが加速、32.80近で越週。19日、タイ政府がロックダウン強化を発表。感染力の強いデルタ株蔓延に対する懸念の高まりもあり、米金利の低下に下押しされる時間帯もあったが、19・20日は底堅く推移。下旬、21日は米企業の好決算が確認され、デルタ株への懸念が和らいだが影響は一時的。その後は東京市場休場、月末週にタイの祝日を控えながらもドルバーツはじり高。26日は中国の株式市場が教育系テック銘柄中心に急落すると33バーツ手前まで上昇し、その後は引けにかけ上げ幅を縮小。27日はタイ祝日の谷間だったが、タイの新規感染者が1万5千人/日まで増加しており、32.90前後の動き。米FOMCでは、市場が想定しているテーパリングのスケジュールよりも遅いことを示唆するような内容だったため29日のドルバーツは小幅に水準を下げた32.80中心の動きとなった。

■ 今月の見通し

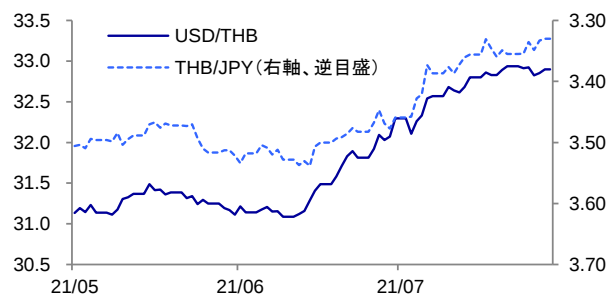
先進国を中心にワクチン接種が進むことで世界経済の正常化が進むと多くの人が考えていたが、ここに来て感染力の強い変異株による感染者数再拡大という問題に直面。ワクチン効果により欧米の重症化率は低下、パウエルFRB議長も米経済の見通しを悪くするようなものではないと評価しているが、世界経済の回復に対する懐疑的な見方が強まっていると感じる。実際、オーストラリアでは景気回復を見込んで中銀が金融政策正常化に向け舵を切った矢先、政策手段の見直しを検討せざるを得ない状況に陥った。今般の感染拡大では特に東南アジアで影響が顕著であり、各国の国内経済に重くのしかかっている。タイでは新規感染者数が日々増加を続け、遂に7月中旬には1万人/日を突破。7月終盤には1.5万人/日と僅か1週間程度で1.5倍、5千人/日も増加した。春以降厳しくなる行動規制下、家計の収入減が家計債務の増加にもつながり、タイ中銀発表によれば、2021年1QのGDP比家計債務は90.5%へ到達。家計部門の経済活動が停滞してタイの内需回復には一層時間がかかる見通し。タイ経済の回復遅延見込みはバーツ売りにつながりやすく、デルタ株への警戒感の高まりもリスクオフでのドル買いを強めることで8月もドルバーツは年初来高値更新をトライしていく動きがメインになると考える。一方、7月FOMCからは明確なヒントが得られず、今月のジャクソンホールまで様子見ムードとなるであろうことから、ドル高が一本調子で進むとは想定しにくい。ただ、基本的にはタイ国内の感染が8月中に改善すると見込みにくい中で、2018年7月以来約3年ぶりの高値33バーツ半ばへ向けて上昇していくパイアスの方が強いと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のランチ事情』
政府による新型コロナ感染拡大防止策により、昼食を食べに外出するというのが久しく出来ておりませんので、ランチでは大半のスタッフがデリバリーでランチをとっています。お昼時間になると、結構な頻度であるモノを見かけます。それは私が勝手に呼んでいるのですが、「パンパン袋」です。「パンパン袋」とは、透明なビニールにサラダや調味料、時には熱々の汁物までもが入れられて、器用に輪ゴムで袋の口を縛り、風船のようになっている袋のことを指します。お昼時間になると、同じ職場の人の分もデリバリーしたのか、このような袋を沢山抱えて歩く人がオフィスがあるビルのエレベーターホールに多くなります。この袋を開ける度に、ちょっとした野菜ならまだしも、熱々のスープを良くもこんな熱々水風船のようにしっかりと詰められるなど感心しております。一度、パンパン袋に至る工程を見たことがありますが、大きな鍋からスープをすくい、それを直接ビニール袋に溢さず注いで、輪ゴムで手際よく口を縛って完成まで1袋5秒もかかっています。タイ国内の新型コロナ感染状況は深刻化しており、当面はパンパン袋のお世話になり、飲食店スタッフの器用さに関心する日が続きそうです。

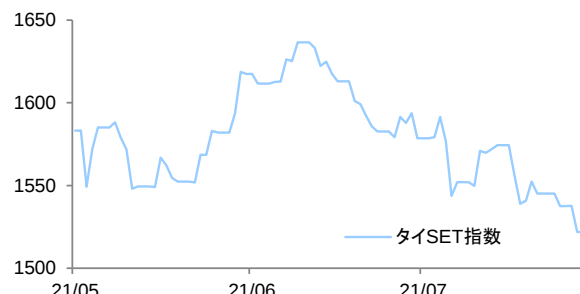
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	-	49.5	47.8
7/5	CPI (前年比)	6月	1.20%	1.25%	2.44%
7/5	CPI Core (前年比)	6月	0.50%	0.52%	0.49%
7/8	消費者信頼感指数	6月	-	37.3	38.9
7/22	自動車販売件数	6月	-	61,758	55,942
7/23	輸出(税関ベース)	6月	38.05%	43.82%	41.59%
7/23	輸入(税関ベース)	6月	47.00%	53.75%	41.59%
7/23	貿易収支	6月	\$1,127M	\$945M	\$796M

(資料) ブルームバーク

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.20	～	4.30
	MYR/JPY	25.64	～	26.32
	JPY/MYR	3.800	～	3.900

マレーシアみずほ銀行 内田 暁

■ 先月の為替相場

7月のリングgit相場は6月に続き更に値幅を伴って下落した。月初4.15台でスタートしたUSD/MYRは、下旬には昨年7月以来1年ぶりに4.24まで上昇するなど、月全体を通じてリング売りへ方向の相場展開だった。

上旬は、1日に感染拡大が顕著なスランゴール州と一部KL地域に対して、強化されたMCO(EMCO)が施行。ムヒディン首相が発表した国家回復計画の進捗遅延が懸念され、リングgitに下落圧力がかかった。また、8日にマレーシア中銀が発表した政策金利は、市場予想通り6会合連続で据え置き率の1.75%。声明文では、コロナ封じ込め策緩和の遅れや世界経済回復鈍化による成長見通しの深刻な下振リスクを懸念する旨の記載が盛り込まれた。1日のEMCO発表後も感染者数の上昇は続き、9日には4.19台までリングは売られた。

中旬にかけてもリング売りは止まらず。節目の4.20をあっさり突破した。13日に発表された米6月CPIは、ヘッドライン及びコア指数共に市場予想を大幅に上回る内容となりドルが反発。翌朝リングgit市場はギャップアップしてスタートし、節目の4.20を突破。14日にはOPECプラスにて、サウジアラビアとUAEが減産幅へ合意に至ったことが報道されると、対立解消に伴う協調減産の縮小が意識され、原油相場は急落。リングgit相場には更なる逆風となった。また、コロナ感染拡大は止まらず連日の1日1万人台を記録。コロナ病床逼迫が懸念される中、リングgit売りを呼び、20日の犠牲祭(当地休日)明け21日には4.25目前でリングは下落した。

下旬は、23日に6月CPI、28日に6月貿易統計の発表があった。CPIは、昨年のベース効果で+3.4%と引き続き高い数値であったものの、市場予想を若干下回る結果となり、マーケット反応は限定的。また、貿易統計では5月に続いて引き続きの好調な輸出動向を確認。一方、26日から開催された特別議会は開催初日から波乱の展開。ムヒディン首相が議会を途中退場した他、非常事態宣言下で施行された勅令を21日付で撤回していたことに野党が激しく非難した。結局、29日にはアブドラ国王が勅令撤回につき遺憾の意を表すなど、ムヒディン首相にとっては厳しい議会となった。

■ 今月の見通し

今月のリングgit相場は、国内政治動向と新型コロナ感染者動向とワクチン進展に大きく左右される展開となりそうだ。

国内政治動向については、今年1月に発令された非常事態宣言が8月1日に終了することで、議会選挙が事実上解禁となる。まず、注目されるのが、連邦議会下院の欠員2名に対する補欠選挙。また、東マレーシアのサラワク州議会選挙も同様に9月任期満了を控え、非常事態宣言に延期されていた為、注目される。新型コロナの感染拡大が止まらない状況下で選挙時期には否が応でも注目が集まる。また、先月26日より開催された特別議会における、ムヒディン政権に対する批判は、今後の政治混乱を彷彿させる。ムヒディン首相率いるPPBM含め、単独過半数を確保可能な政党不在の中、選挙時期が近づくに連れ、政党同士の議席争奪戦は必至。感染状況が悪化した状態で選挙を強行し、更なる感染拡大を招くような結果となった場合、リングgit相場への悪影響回避は難しいだろう。

国外マーケットに目を向けると、原油相場は先月のOPECプラス会合で減産幅縮小に関する合意がなされ、今月以降に日量40万バレルの減産幅縮小が実施されることから、需給緩和が期待される。昨年11月より続いていた上昇トレンドの変化にも注意したい。また、先月28日のFOMCの結果を踏まえ、ドル金利並びに為替の上値は抑えられた。パウエル議長が、目標に向けた経済の進展は認めつつも、資産の買取開始時期について、まだ現時点で決める段階にはないとしたことが主因と見ている。年内FOMCは9月、11月、12月に控えている他、今月26～28日の予定で開催されるジャクソンホール会議へ市場の注目がシフトした格好だ。

国内の新型コロナ動向については、感染者は連日の高値更新であり、死亡者数やコロナ病床の逼迫率を見ると、首都圏を中心に楽観視できる状況ではない。政府はワクチン普及を積極的に推進しており、今後は死亡者数やコロナ病床の逼迫動向に注目が集まる。こういった数値が落ち着きを示せば、リングgit相場を支える要因となるが、まだ暫く時間が必要と見ている。

■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のランチ事情』

マレーシアではランチをみんなで集まって食べる光景を比較的好く見かけます。最近ではコロナ感染拡大で店内飲食が禁止ですので、デリバリー注文かお弁当を黙々と食べる寂しい日々が続いています。ただ、みんなで一緒にデリバリー注文して分け合って食べることも結構よくあります。こうしてみんなで一緒にのものを食べるという習慣はコロナ下でも大切にされています。

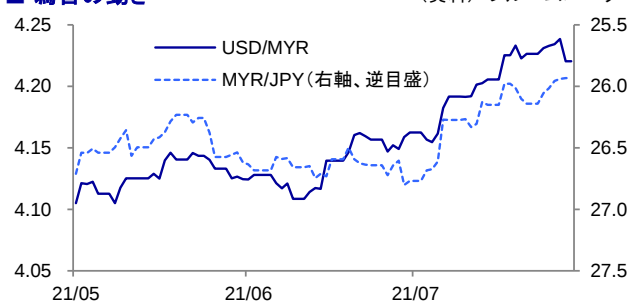
さて、マレーシアで仲間同士でランチを取る場合、日本人が気を付けるポイントは、やはり宗教になります。多民族国家ならではのイスラム教を中心にヒンドゥー教、仏教など様々な宗教徒と食事をする場合、お店選びは重要です。また、イスラム教徒は1日5回礼拝を行います。その1回が正午にあります。更に、イスラム教徒の男性は毎週金曜日はモスクでお祈りしますので、曜日や時間帯への配慮は皆さんが気持ちよく食事をする上で必要不可欠な要素です。

ビル併設のフードコートでは、マレーシアのローカルフードから、インド料理、韓国料理、中華、和食、の他、各種ファストフードが揃っていますので、お手頃な値段で気軽に色々な料理を楽しむことができます。マレーシアに来て物価の安さを感じられるのは、まさにこのお昼時ではないかと思います。首都KLを中心に、ひと昔前と比べると随分高くなったと言われますが、それでも日本で言う所のワンコイン(500円)を払えば、かなり充実したランチタイムを過ごすことができます。

食後にコーヒーを！という人も比較的好く見かけます。おしゃれ系チェーンからローカル系までバラエティ豊富に揃っており、さすが南国。どれもおいしいです。一方、気になるお値段はというと、ランチ程にお手軽！とは言えなさそうです。

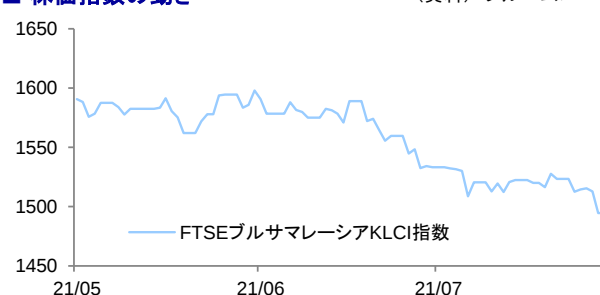
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/8	Policy Rate OPR	Jul	1.75%	1.75%	1.75%
7/12	Industrial Production	May	21.0%	26.0%	50.1%
7/23	CPI	Jun	3.5%	3.4%	4.4%
7/23	Core CPI	Jun	-	0.7%	0.8%
7/28	Exports	Jun	11.0%	27.2%	47.3%
7/28	Imports	Jun	15.9%	32.1%	50.3%
7/28	Trade Balance MYR	Jun	17.9B	22.2B	13.7B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14300 ~ 14800
 IDR/JPY 0.74 ~ 0.78
 JPY/IDR 128.21 ~ 135.14

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

7月のドルルピアは、横ばいで推移した。
 ドルルピアは月初2日、14500台前半で取引を開始した。インドネシアでのコロナウィルス感染状況は厳しさを増す中で、この日ジョコ大統領がジャワ島とバリ島で緊急の行動制限措置を実施すると発表。また同日に発表された6月のインドネシア消費者物価指数(CPI)は、前年同期比1.33%のプラスと市場予想を下回る中、翌日2日にかけて14500台後半までルピアは上値重く推移した。米6月雇用統計が発表されその内容が期待はずれと受け止められたことで、ドル安の流れとなる中、週明けの5日は14500を割り込んだ。しかし、インドネシアでのコロナウィルス感染者数が大きく伸びていく中、ルピアの上値は抑えられ、じりじりと下落。週後半8日には再び14500台後半までルピアは値を落とした。翌週初12日は再び14500を割り込むも、インドネシア中銀ペリー総裁は新型コロナウイルス感染拡大を抑える為の行動制限の影響を踏まえ、2021年の経済成長率予測を4.6%から3.8%に大幅に引き下げたことを明らかにしたことや、14日にはデルタ株の感染拡大が深刻化しているインドネシアで、緊急活動制限が4〜6週間延長される見通しと地元メディアが伝えたこともあり、ルピアはじりじりと値を落とし、週末19日にかけて14500台半ばまでルピア安が進んだ。
 翌週19日以降は22日にインドネシア中銀政策決定会合の結果を控え、14500台で小動きが続いた。22日、ルピアは14500を挟んで前日比ややルピアがやや強含む中、市場予想通り政策の現状維持が発表され、主要政策金利の7日物リバースレボ金利を史上最低水準の3.50%に据え置かれた。予想通りの結果にルピアへの影響は限定的に留まった。迎えた月末週末も実需筋のドル買い需要をこなしつつ、14500を挟んでの推移が続き、月末を迎えている。(29日終値時点)

■ 今月の見通し

8月のドルルピアは、ルピアの上値重い推移を予想する。
 6月以降、米金融政策について早期の量的緩和の縮小と利上げ時期の前倒しが意識されることがルピアの重石となっている。米国でのコロナウィルスワクチン接種が進み、経済回復が進む中、対照的にインドネシアの状況は非常に苦しいものとなっている。7月是一日のコロナウィルス感染者、死者数ともにこれまでの記録を大幅に更新を続け、今も感染終息には程遠い状況が続いている。既述の通り、インドネシア中銀は経済見通しの下方修正に追い込まれている。このような状況下、米量的緩和の縮小と利上げが近づくことはルピアにとって脅威と言えよう。中長期的には18年の米利上げ局面を超えるルピア安を迎える可能性も孕んでいる。
 足元は、米長期金利は上値を抑えられている格好となっているが、上昇局面を迎えることを警戒すべきだろう。7月のインドネシア10年物国債の海外投資家保有額は966兆ルピアとなっており、6月末対比で11兆ルピア分減少している。こうした動きはルピアの上値を抑えることにつながっているが、売り余力はまだ相応にあることに注意が必要だ。
 一方で、ルピアのサポート材料となっているインドネシア貿易収支は6月も黒字を計上したが、輸入の回復が続く中、その額は前月対比で縮小している。7月に入ってインドネシアのコロナウィルス感染状況が最悪期となる中、輸入がどこまで維持されるかは、注視する必要があるものの、中長期的には貿易収支黒字は縮む方向にあるだろう。ルピアのサポート材料が剥落していくことにも長い目線では警戒したい。

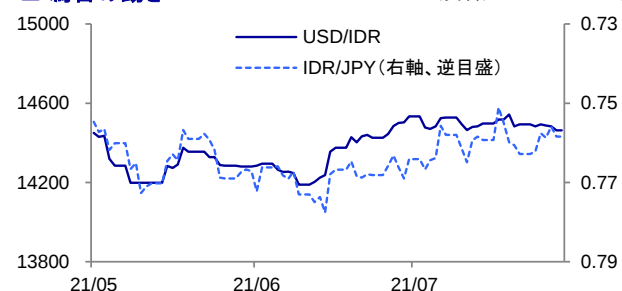
8月もコロナウィルス感染拡大と米金利上昇を警戒すべき時間が続くことから、ルピアは上値重く推移することを予想したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

大変恐縮なのですが、諸般の事情により、暫くの間休載とさせていただきます。

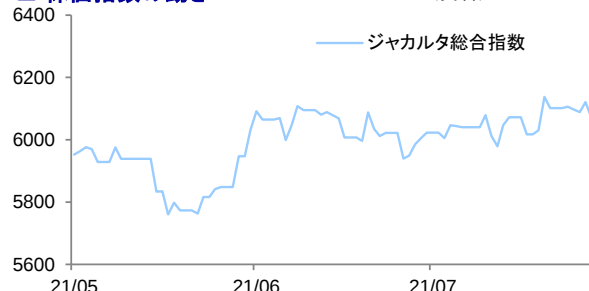
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	CPI(前年同月比)	6月	1.45%	1.33%	1.68%
7/7	外貨準備高(USD B)	6月	-	137.1	136.4
7/15	貿易収支(USD M)	6月	2245	1316	2698
7/15	輸出(前年比)	6月	48.45%	54.43%	61.97%
7/15	輸入(前年比)	6月	44.94%	60.12%	68.69%
7/22	BI 7days リバースレボ金利	-	3.50%	3.50%	3.50%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 49.50 ~ 50.00
JPY/PHP 2.165 ~ 2.210

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

7月のドルペソ為替相場は6月のFOMC以降のペソ下落基調継続により、約1年ぶりの水準までペソ安が進行。

フィリピンの景気回復に対する懸念に加え、OPECプラスによる協調減産に対する不透明感から原油先物が大幅上昇したことやフィリピン6月消費者物価指数が4.1%と5か月連続で中央銀行がターゲットとするレンジ上限の4%を超えて推移したことが嫌気されFOMC以降のペソ安基調が継続。また、8日に需給が為替水準を決め、変動の最小化以外では市場に関与しないとのフィリピン中銀総裁の発言を受け、ペソ安に拍車が掛かった。その後もデルタ株を巡るアジア域内からの資金流出やフィリピン5月貿易収支悪化も材料視され、主要アジア通貨の中でもペソの下落率が高く、昨年6月以来となる節目の1米ドル＝50.0超えとなった。

中旬にはフィッチによるフィリピンの信用格付け見直し下方修正やフィリピン中銀総裁が景気回復を最優先とし緩和小スタンスを維持、ペソ安に懸念はないと改めて表明したことから、ペソ安地合いの流れが継続。また、6月の米消費者物価指数の強い内容を受け、一部市場参加者による早期テーパリング観測から、パウエル議長らのハト派な議会証言を受けて、アジアの主要株式相場は反発を見せるも、フィリピン株式は軟調推移となり、ペソは主要アジア通貨の中で下落を主導した。一方で、中国経済指標は景気回復の安定化の兆しを見せる内容だったことからリスクセンチメントが改善し、13日には節目の1米ドル＝50.0ではサポートされるも10営業日ぶりにペソ高になるなどペソが強含む局面も一部見られた。

また、OPECプラスでの減産幅縮小合意を受けて原油先物が5ドル超の大幅下落となったほか、足元の米経済成長と好調な米企業決算が改めて評価され、米株式相場が大幅反発するなど、市場にリスクオンのセンチメントが戻ったことでペソ高となる局面もあったが、フィリピン国内でデルタ株感染が確認され、外出制限厳格化に対する警戒感が広がり、フィリピン株式・ペソ共に下落基調変わらずとなり、約1年ぶりの水準となる1米ドル＝50.410までペソ安が進行するなど、週間ベースでは6週連続でのペソ安となった。

■ 今月の見通し

急速なペソ安に対する警戒感はあるが引き続きペソ安圧力が掛かりやすい展開を想定。

米国のテーパリングのタイミングは当面の米経済指標の結果であるため、ペソは雇用や物価関連の米経済指標等、米金融政策見直しに対する感応度が高い状態が継続する見込み。

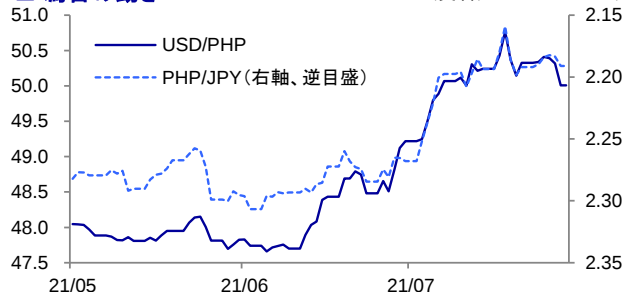
また、フィリピン中銀はここ最近のインフレ率はターゲットとしている2～4%の上限を超えて推移しているものの、景気回復を最優先とし、緩和小スタンスを維持するとしているほか、為替水準は市場の需給が決め、変動の最小化の目的以外では市場に関与しない、ペソ安に対する懸念はないとのフィリピン中銀総裁のペソ安容認と取れる発言から、引き続き、ペソは他アジア通貨対比でも売られやすい展開を見込む。

デルタ株感染拡大やそれに伴う外出制限の延長等、フィリピン経済見直しに不透明感が漂い、GDP見直しも下方修正されているほか、原油価格はOPECプラスの減産幅縮小合意やデルタ株感染拡大による需要減少懸念を受けて一旦の下落を見せたものの、世界的需要回復見直しを背景に協調減産幅の縮小が実施されても、需給環境は供給不足状態が続くとの見方から反発を見せ、強気な見通しとなっていることもペソ売り材料視されよう。

こうしたフィリピン国内外の状況を鑑みると、足元の急速なペソ安に対する反動は想定されるものの、ペソを積極的に買い進めるような材料に乏しく、ペソ軟調地合いは継続し、1米ドル＝50.00～50.50をコアレンジとする水準での推移が想定される。

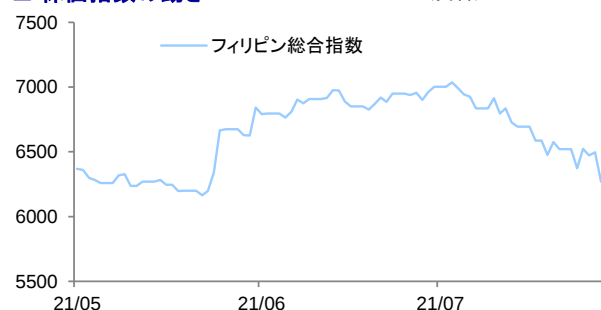
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 73.00 ~ 75.50
INR/JPY 1.45 ~ 1.53

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【7月の米ドル/インドルピーは直近高値を更新した】

74.38で当月取引をスタート。良好な米経済指標を背景に米ドルが底堅い展開で、ドルインデックスが3か月ぶり高値となるとドル/ルピーも2日には74.875まで上昇。ただ、2日金曜の引け後北米時間で発表された米雇用統計で非農業部門雇用者数は上振れしたものの、失業率・平均時給が事前予想を下回る結果となったことから直近の米ドル高が調整、翌週月曜日のドル/ルピーも調整、7日につけた74.28が当月の安値に。ただし、OPECプラス会合が合意に至らず、原油価格が一段高となるとルピー売り材料となりドル/ルピーも上伸、すぐに74.75近辺まで回復。一段と上値を伸ばすかと思われたが国内フードデリバリー企業の13億ドルのIPOに加え、Eコマース企業数社の株式発行も予定されており、海外投資家のルピー買いが意識され、上値の重い展開に。

12日週に入ってもフードデリバリー企業IPOの注目度が強かったことに加え、半期に一度の米FRB議長の議会証言で「緩和姿勢に差し迫った変化はない」と示唆したことからマーケットは米金利低下+ドル軟化で反応し、ルピー支援材料に。ただし、ドル安方向ではインド中銀のドル買い/ルピー売りが入っていたことに加え、インド変異種が世界でまん延する中、経済回復に対する不確実性が意識され、株安と共にリスク回避的な動きとなり新興国通貨全般的に重い展開。

4週目に入るとアジア圏各国が今年GDP予測値が下方修正へ。併せて為替市場でもタイバツ・インドネシアルピア・マレーシアリングは対ドルで年初来安値となると、20日にドル/ルピーも当月高値となる74.96を示現。ただ、国内Eコマース企業が米国の親会社を含む複数の投資家から36億ドルを調達したことに関連したドル売りが出ているとの噂に急激なドル安に。祝日明けの22日には74.40を下回る。

5週目は74.40-50の狭いレンジで横ばい推移となり、74.38で28日取引を終了した。

■ 今月の見通し

【8月の米ドル/インドルピーは高値圏での推移を予想】

国際通貨基金は7/28に発表した最新の世界経済見通しで、今年のGDP予想について米国やユーロ圏を上方修正した一方で新興国全体の予想を6.7%から6.3%へ下方修正した(因みにインドの見通しは12.5%から9.5%へ下方修正)。欧米が上方修正される一方、新興国が下方修正された背景としてワクチンの普及状況を指摘した。

インドネシア、タイ、ベトナムなどの国でのコロナ第三波については日本でも毎日報道されているところ。実際アジア太平洋全体での日次感染者は6/22に91,593人まで減少したが、7/27には171,344人と5週間で2倍近くに急増している。死亡者数について見ると7/3に1,804人だったものが7/27には3,747人となっており、こちらも倍増。特に後者については欧米の曲線とは全く違う動きとなっている。これを要因の1つとしてアジア通貨は売られやすい地合いとなっており、6月初めから数えてもタイバツが5.5%、フィリピンペソが5.2%、韓国ウォンが4.2%、マレーシアリングが2.6%それぞれ対ドルで安くなっている。コロナの状況についてインドは今のところ落ち着きを見せているが、アジア通貨全体が売られる中でルピーにも圧力がかかっているほか、第三波が9月に発生するとの言説が印地場紙では見られる状況で、ルピーの買い持ちポジションを積極的に作る地合いではないというのがトレーダーたちの本音では。

ルピーの買い材料としてはインド企業のIPOや出資に絡んだ外国人投資家のドル売り/ルピー買いが挙げられるが7月確認されたように、ルピー高になりそうな局面ではインド中銀からドル買い/ルピー売り介入が出ることによって投資資金流入による為替市場への影響を吸収することが想定される。実際過去1か月の間にインドの外準は88億ドル増加している。これは国内Eコマース企業の36億ドル調達や、フードデリバリー企業のIPOで海外投資家が買ったと目される6-8億ドルと比較しても、巨大な金額であることが分かる。

その他の材料では原油価格上昇(ルピー安要因)、米テーバリング観測の強まり(ドル高要因)があるが、前者は注意が必要だがサウジが譲歩するかたちでOPECプラスは一旦合意済み。後者については7月末のFOMCが玉虫色だったことから8月末のジャクソンホールまでは一旦落ち着きを見せるか。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

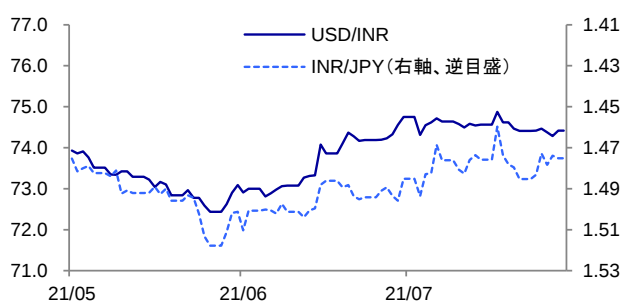
『当地のランチ事情』

コロナ以前の話になりますが、ニューデリーオフィスでは大半の方々が奥さん若しくはお母さんが心を込めて作ったお弁当を持参していた印象です。中身はカレーのようなものをロティと言われる全粒粉のトルティーヤのようなパンやライスと一緒に食べるのが一般的のようでした。

ランチの時間は日本よりも遅く14時頃から15時頃がスタンダードで、ランチ中はお話をしたり、クリケットやニュースを観ながら各々ランチ時間を楽しんでおりました。また、ランチにデリバリーをオーダーするのもインドでは普通の光景となっており、デリバリーチャージも安く約70円ほどで頼めちゃうのでランチ時間の少し前にデリバリーアプリを使用して注文を済ませておけば30分から40分ほどで配達してくれるのでとても便利です。屋台飯もインド人には人気なようで、ランチ時間になると屋台の周りに人だかりができていのもよく目にします。屋台飯はとても安く30円ほどから300円ほどで買うことができるので、安くすぐに食べることができ、仕事の合間のランチ時間にはもってこいです。(ニューデリー 七戸)

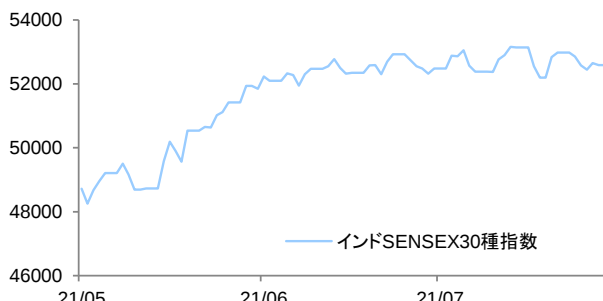
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
7/1	製造業PMI
7/12	鉱工業生産
7/12	CPI
7/15	貿易収支

(資料) ブルームバーク

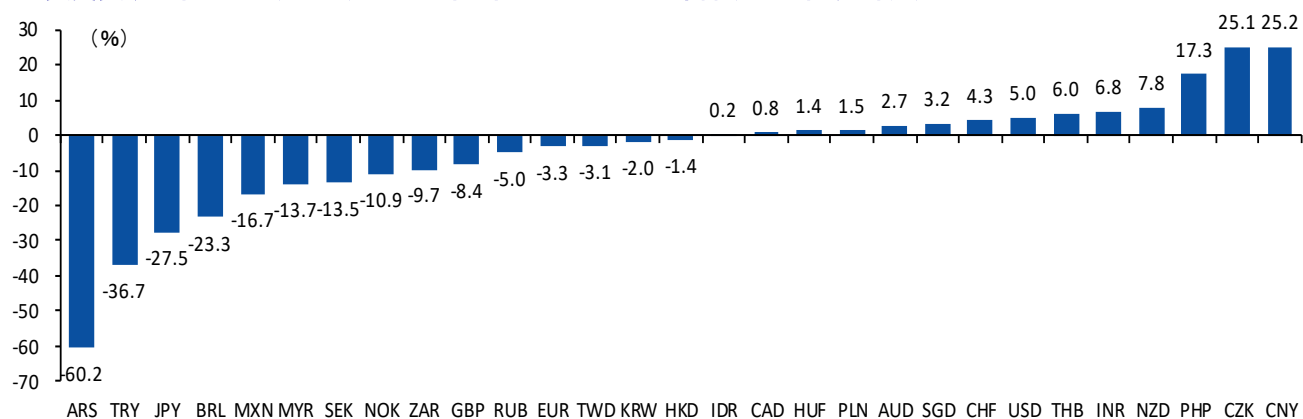
期間	予想	結果	前回
6月	-	48.1	50.8
5月	32.0%	29.3%	134.6%
6月	6.59%	6.26%	6.30%
6月	\$6.4bio赤字	\$6.4bio赤字	\$6.3bio赤字

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2020年末	2021年7月末	騰落率	株式市場	2020年末	2021年7月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	30606.48	34935.47	14.1%	-
日本	USD/JPY	103.25	109.72	6.3%	日経平均株価	27444.17	27283.59	-0.6%	-6.4%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2216	1.187	-2.8%	ドイツDAX指数	13718.78	15544.39	13.3%	13.3%
英国	GBP/USD	1.367	1.3904	1.7%	ロンドンFTSE100指数	6460.52	7032.3	8.9%	7.0%
豪州	AUD/USD	0.7694	0.7344	-4.5%	S&P/ASX200指数	6587.096	7392.624	12.2%	17.6%
カナダ	USD/CAD	1.2725	1.2475	-2.0%	S&Pトント総合指数	17433.36	20287.8	16.4%	18.7%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.5272	6.4614	-1.0%	上海総合	3473.069	3397.357	-2.2%	-1.2%
香港	USD/HKD	7.7531	7.7718	0.2%	香港ハンセン	27231.13	25961.03	-4.7%	-4.9%
インド	USD/INR	73.07	74.415	1.8%	インドSENSEX30種	47751.33	52586.84	10.1%	8.1%
インドネシア	USD/IDR	14050	14463	2.9%	ジャカルタ総合	5979.073	6070.039	1.5%	-1.4%
韓国	USD/KRW	1086.51	1150.09	5.9%	韓国総合株価	2873.47	3202.32	11.4%	5.3%
マレーシア	USD/MYR	4.0203	4.2205	5.0%	ブルサマレーシアKLCI	1627.21	1494.6	-8.1%	-12.5%
フィリピン	USD/PHP	48.03	50.006	4.1%	フィリピン総合	7139.71	6270.23	-12.2%	-15.6%
シンガポール	USD/SGD	1.3221	1.3544	2.4%	シンガポールST	2843.81	3166.94	11.4%	8.7%
台湾	USD/TWD	28.094	27.959	-0.5%	台湾加権	14732.53	17247.41	17.1%	17.6%
タイ	USD/THB	29.959	32.9	9.8%	タイSET	1449.35	1521.92	5.0%	-4.4%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2021年6月時点)



■ 実質GDP成長率

	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2021Q2	2019	2020
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	1.9	-5.1	-31.2	33.8	4.5	6.3	6.5	2.3	-3.4
日本*	-7.4	-2.0	-28.6	22.9	11.7	-3.9		0.0	-4.7
ユーロ圏	1.0	-3.2	-14.4	-4.0	-4.6	-1.3	13.7	1.4	-6.4
英国	1.2	-2.2	-21.4	-8.5	-7.3	-6.1		1.4	-9.8
豪州	2.1	1.4	-6.2	-3.7	-1.0	1.1		1.9	-2.4
カナダ*	0.4	-7.9	-38.1	41.7	9.3	5.6		1.9	-5.3
エマージングアジア									
中国	5.8	-6.8	3.2	4.9	6.5	18.3	7.9	6.0	2.3
香港	-3.6	-9.1	-9.0	-3.6	-2.8	8.0	7.5	-1.7	-6.1
インド	3.3	3.0	-24.4	-7.4	0.5	1.6		8.3	6.8
インドネシア	5.0	3.0	-5.3	-3.5	-2.2	-0.7		5.0	-2.0
韓国	2.3	1.5	-2.5	-0.8	-0.7	1.9	5.9	2.2	-0.9
マレーシア	3.7	0.7	-17.2	-2.7	-3.4	-0.5		4.3	-5.6
フィリピン	6.6	-0.7	-17.0	-11.6	-8.3	-4.2		6.1	-9.6
シンガポール	1.3	0.0	-13.3	-5.8	-2.4	1.3	14.3	1.4	-5.4
台湾	3.7	2.5	0.4	4.3	5.2	8.9	7.5	3.0	3.1
タイ	1.3	-2.1	-12.1	-6.4	-4.2	-2.6		2.3	-6.1

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	20/11	20/12	21/01	21/02	21/03	21/04	21/05	21/06	2019	2020
	(%)								(%)	
先進国										
米国	6.7	6.7	6.3	6.2	6.0	6.1	5.8	5.9	3.7	8.1
日本	3.0	3.0	2.9	2.9	2.6	2.8	3.0	2.9	2.4	2.8
ユーロ圏	8.1	8.1	8.2	8.2	8.1	8.1	8.0	7.7	7.6	7.9
英国	5.1	5.2	5.1	5.0	4.9	4.8	4.8		3.8	4.4
豪州	6.8	6.6	6.4	5.9	5.7	5.5	5.1	4.9	5.2	6.5
カナダ	8.6	8.8	9.4	8.2	7.5	8.1	8.2	7.8	5.7	9.6
エマージングアジア										
中国		4.2							3.6	4.0
香港	6.3	6.6	7.0	7.2	6.8	6.4	6.0	5.5	2.9	5.5
インドネシア				6.3					5.1	6.0
韓国	4.2	4.5	5.4	4.0	3.9	3.7	3.8	3.7	3.8	4.0
マレーシア	4.8	4.8	4.9	4.8	4.7	4.6	4.5		3.3	4.5
フィリピン			8.7	8.8	7.1	8.7	7.7		5.1	10.4
シンガポール		3.3			2.9			2.7	2.2	3.0
台湾	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	4.2	4.8	3.7	3.9
タイ	2.0	1.5							1.0	1.6

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	20/11	20/12	21/01	21/02	21/03	21/04	21/05	21/06	21/07	2019	2020
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	1.2	1.4	1.4	1.7	2.6	4.2	5.0	5.4		1.8	1.2
日本	-0.9	-1.2	-0.6	-0.4	-0.2	-0.4	-0.1	0.2		0.5	0.0
ユーロ圏	-0.3	-0.3	0.9	0.9	1.3	1.6	2.0	1.9	2.2	1.2	0.3
英国	0.3	0.6	0.7	0.4	0.7	1.5	2.1	2.5		1.8	0.9
豪州		0.9			1.1			3.8		1.6	0.9
カナダ	1.0	0.7	1.0	1.1	2.2	3.4	3.6	3.1		1.9	0.7
エマージングアジア											
中国	-0.5	0.2	-0.3	-0.2	0.4	0.9	1.3	1.1		2.9	2.5
香港	-0.3	-1.0	2.6	0.5	0.6	0.8	1.0	0.7		2.9	0.3
インド	6.9	4.6	4.1	5.0	5.5	4.2	6.3	6.3		3.7	6.6
インドネシア	1.6	1.7	1.6	1.4	1.4	1.4	1.7	1.3		2.8	2.0
韓国	0.6	0.5	0.6	1.1	1.5	2.3	2.6	2.4		0.4	0.5
マレーシア	-1.7	-1.4	-0.2	0.1	1.7	4.7	4.4	3.4		0.7	-1.1
フィリピン	3.3	3.5	4.2	4.7	4.5	4.5	4.5	4.1		2.5	2.6
シンガポール	-0.1	0.0	0.2	0.7	1.3	2.1	2.4	2.4		0.6	-0.2
台湾	0.1	0.1	-0.2	1.4	1.2	2.1	2.5	1.9		0.6	-0.2
タイ	-0.4	-0.3	-0.3	-1.2	-0.1	3.4	2.4	1.3		0.7	-0.8

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2019	2020
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.3	-2.2	-2.1	-2.5	-2.6	-2.9	-3.2	-2.2	-3.0
日本	3.3	3.4	3.4	2.9	2.9	3.3	3.4	3.4	
ユーロ圏	2.4	2.4	2.1	2.2	2.0	2.2	2.5	2.4	2.2
英国	-4.4	-3.1	-2.4	-2.3	-2.2	-3.5	-3.2	-3.1	
豪州	0.2	0.7	1.2	1.8	2.0	2.6	3.1	0.7	
カナダ	-2.3	-2.1	-2.1	-2.1	-2.0	-1.8	-1.0	-2.1	-1.8
エマージングアジア									
中国	0.9	0.7	0.3	0.9	1.3	1.8	2.4	0.7	
香港	5.6	5.9	4.7	5.8	6.9	6.5	9.0	5.9	
インド	-1.6	-1.0	-0.8	0.4	1.3	1.3	0.9	-1.0	1.3
インドネシア	-2.9	-2.7	-2.4	-2.1	-1.3	-0.4	-0.2	-2.7	-0.4
韓国	3.8	3.7	3.8	3.6	3.8	4.4	4.9	3.7	
マレーシア	3.5	3.3	2.8	2.5	3.5	4.4	4.6	3.3	
フィリピン	-1.0	-0.1	0.4	1.5	2.6	3.5	3.3	-0.1	
シンガポール	14.8	14.3	14.8	15.6	16.8	17.6	18.6	14.3	17.6
台湾	11.3	10.6	10.4	10.7	12.8	13.9	14.6	10.6	13.9
タイ	6.1	7.0	6.7	6.3	5.8	3.5	0.9	7.0	

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在(%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準(%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.00-0.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2020/3/15	-100bp	2021/6/16	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2021/7/16	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2021/7/22	現状維持
英国	バンク・レート	0.10	緩和: 2020/3/11	0.75	2020/3/19	-15bp	2021/6/24	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	0.10	緩和: 2011/11/1	4.75	2020/11/3	-15bp	2021/7/6	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.25	緩和: 2020/3/4	1.75	2020/3/27	-50bp	2021/7/14	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.85	緩和: 2012/6/8	6.31	2020/4/20	-20bp	2021/7/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	4.00	緩和: 2019/2/7	6.50	2020/5/22	-40bp	2021/6/4	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	3.50	緩和: 2019/7/18	6.00	2021/2/18	-25bp	2021/7/22	現状維持
韓国	7日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/7/18	1.75	2020/5/28	-25bp	2021/7/15	現状維持
マレーシア	翌日物金利	1.75	緩和: 2019/5/7	3.25	2020/7/7	-25bp	2021/7/8	現状維持
フィリピン	翌日物金利	2.00	緩和: 2019/5/9	4.75	2020/11/19	-25bp	2021/6/24	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2021/6/23	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/10/1	-50bp	2020/10/1	-50bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBILレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行